



歴史Ⅰ授業まとめ

2014 年度夏学期月曜日 3 限

作成 : L12-18 Rvsunggari(2014 年入学)

○これは 2014 年度夏学期月曜 3 限の歴史 I (田中創教官)の授業をまとめたものです。

○ここには授業中に扱った分野を超える内容が多々含まれております。シケプリとして用いる際には各自情報の取捨選択をお願いします。

○著者はローマ史・古代キリスト教史に関して興味があり、高校時代からそれなりに勉強してきたつもりですが、それ以外の分野をはじめとして一定の誤謬が含まれるかもしれません。誤謬を見つけたら訂正するもしくは作成者に通報していただけると幸いです。

○これをシケプリとして用いる人たちへ。おそらく、歴史 I の試験に臨むにあたっては内容の暗記というよりも、この内容をあくまで土台として、授業で扱った諸テーマについての理解を深め、自分なりの歴史解釈を形成することが大切です。

○では、このプリントが読者諸氏の歴史 I の授業、そして地中海史・古代宗教史全体に対する理解を深める一助となれば幸いです。

イエスが言った、「あなたの面前にあるものを知りなさい。そうすれば、あなたに隠されているものはあなたに現されるであろう。なぜなら、隠されているもので、顕にならないものはないからである」(トマスによる福音書語録 5, 荒井献訳)

第一回(4/14)

テーマ：「ミラノ勅令」

- ローマ史
- ・ 王政(ca.762BCE~ca.509BCE)
 - ・ 共和政
 - ・ 帝政→(1)前期帝政(元首政)(27BCE~235CE)
アウグストゥス~セウエルス朝まで
 - (2)軍人皇帝時代(235~284CE)
 - (3)後期帝政(専制君主政)(284~395CE)
 - (4)東西分裂(395CE)
 - ・ 東ローマ帝国(~1453)
 - ・ 西ローマ帝国(~395)

史料『ミラノ勅令』→二つの原典からの引用

_____：ラクタンティウス『De mortibus persecutorum(迫害者たちの死について)』(羅)

【 】：エウセビオス『Historia ecclesiastica(教会史)』(希)

本来の「ミラノ勅令」はどういうものであったのか？

[時代背景]

293~ ディオクレティアヌス帝によるテトラルキア(四分統治)の施行。東・西に正副 4 皇帝
305 年のディオクレティアヌス帝退位後に内乱が勃発、313 年時点では東方正帝リキニウス
と西方正帝コンスタンティヌスしか残らなくなる

313 年、リキニウスが東方副帝マクシムス・ダイアを倒して帝国東方を統一

[特徴]

- ・ 東西皇帝の連名で書かれている
L7 に「我、皇帝コンスタンティヌスと、我、皇帝リキニウス」
→どちらが出したのかわからない
- ・ 属州総督に向けた書簡であり、一般市民向けではない
L24 に「貴官の役所」とある。

[実際のミラノ勅令]

ミラノでのコンスタンティヌスとリキニウスの会談は確かに行われた(L7 より)が、この「勅令」自体がミラノで発布された証拠はない。

また、コンスタンティヌスではなく、リキニウスが出した可能性が高い。ちなみにマクシミヌス・ダイアはキリスト教徒を迫害していた(教会財産の没収)ため、「ミラノ勅令」は東方の一属州総督への「キリスト教徒迫害停止」の書簡でリキニウスがニコメディア(帝国東方の首都、現:トルコ共和国イズミット)で出した可能性が高い。(ラクタンティウスの著作はここに依拠する) なお、ラクタンティウスによる『De mortibus persecutorum』には迫害者としてマクシミヌス・ダイアが挙げられている。

この「勅令」は少なくとも、ラクタンティウスやエウセビオスの著作への引用の段階では皇帝(発布したのがどちらであったとしても)から一属州総督への「親書」の形態をとっている。つまり、これは「勅令」であったのかさえ疑わしい。

※コンスタンティヌスは 313 年以前よりキリスト教徒に寛容な政策を展開。さらに軍人皇帝期でもキリスト教徒に寛容な皇帝は存在。

※エウセビオスがなぜ「リキニウス」を「コンスタンティヌス」に捏造したか？

リキニウスは 314 年以降にコンスタンティヌスと内戦を起こして敗北、コンスタンティヌスはローマを「再統一」した。このようにエウセビオスたちがキリスト教を布教し、キリスト教の権威を高めるために「コンスタンティヌス」の名前が必要だった。

[まとめ]

高校の世界史の教科書では「ミラノ勅令」は「コンスタンティヌスによって」「ミラノで出された」「勅令」とされている。しかし、歴史的に文献を読み、時代背景の考察をすれば教科書とは別の事実が見えてくる。

第二回(4/21)

テーマ:元首政期ローマ支配下のギリシア都市——エフェソスを事例に

配布史料:ガイオス＝ウィビオス＝サルタリオスによるエフェソスのアルテミス祭祀

(配布史料については別途「歴史Ⅰ 第二回史料脚注」を活用してください)

[時代背景—エフェソスの歴史]

- ・ 前 17 世紀~6 世紀半ば

ヒッタイト王国、リュディア王国の支配下に入る

- ・ 前 800 年頃

イオニア人(アテネを中心とする)による植民活動が活発化、このころにはイオニア同盟が結成され、エフェソスもイオニア同盟に加入する。

- ・ 前 6 世紀~4 世紀中葉

アケメネス朝ペルシアの支配を受ける

- ・ 前 499 年

ミレトス・サルディスなどのイオニア同盟諸都市とともに対ペルシア反乱に参加。ペルシア戦争の端緒となる

- ・ 前 334 年

マケドニア王国のアレクサンドロス大王によって征服される。

- ・ 前 290 年

アレクサンドロス大王のディアドコイ(後継者)であるリュシマコスによる植民活動

- ・ 前 282~133 年

ペルガモン王国の支配を受ける

- ・ 前 133 年

ローマのアシア属州設置に伴い、共和政ローマに編入。

以後、「内乱の 1 世紀」ではポンペイウス・ブルートゥス・アントニウス・クレオパトラなどの内戦の敗者側につき続ける



[祭式規定]→配布史料(B)を参照

- ・年月日情報

セクストス＝アッティオス＝スブラノスが 2 度目にして、マルコス＝アシニオス＝マルケルスが執政官の年(L1-L2)とある。共和政期以降、ローマでは「〇〇と××が執政官の年」という表現でその年を表していた(日本における元号のようなもの)。これはローマにおける執政官職任期が一年であることと結びついている。またここでは、「ティベリオス～」とあるようにエフェソス市のローカルな年月日の表し方もなされている。

- ・奉納物

女神アルテミス(エフェソスで盛んに崇拝される)とエフェソス市各組織(市民団・参事会・長老会・6 部族(*)・青年団 etc...)にガイオス＝ウィビオス＝サルタリオス(以下サルタリオス)が奉納物を納める(女神の模像×9、皇帝や各組織の肖像×20、基金 20000 デナリウス)

* 古代ギリシアにおける「部族」はクレイステネスの改革にも見られるが、アジアやアフリカの原始社会の「部族」と異なり、民主政下で議員を選出するための行政区のようなものである。

- ・模像と肖像の詳細(像の形・重量・献呈対象・管理方法)

- ・像を用いた祭列規定(執行日・祭列の道順・運搬役・罰則)

ちなみに祭列の道順は配布史料中の地図によれば、

Artemision(74)→Magnesian Gate(70)→Theater(25)→Northern Gate(20)→Aretmision

* 参事会や民会、アルテミス祭などの重要な行事は Theater(25)で行われることが多い。

- ・20000 デナリウスの基金から生じる利子の運用(富くじでの分配対象)

- ・利子の支払い方法と支払い責任及びサルタリオス死後の基金の運用方法について

- ・規定に反した者への罰則規定

- ・州総督と副官による承認



[民会決議]→配布史料(A)を参照

・年月日情報

ティベリオス＝クラウディオス＝アンティパトロス＝ユリアノスが議長年のポセイデオン月の6日(L1)とある。ここでは(B)にみられるローマ式の年月日の記述法は見られず、エフェソス市独自の年月日記法のみとなっている。

・前文(エフェソス市への恩恵者を顕彰することの意義について)

エフェソス市への恩恵者(ここではサルタリオス)に大きな名誉で報いることにより、さらなる市への恩恵者を誘致する意図が見える。

・サルタリオスの恩恵の説明

模像・肖像及び基金の奉納とそれに付随する祭列や分配金の説明(配布史料(B)と同じ)

州総督や副官の支持・後援

・決議内容(恩恵者サルタリオスへの報酬)

- ① サルタリオスの像を2カ所に設置
- ② 黄金の冠によるサルタリオス顕彰
- ③ 祭列の承認(参事会・民会・属州総督による)
- ④ サルタリオスの規定の恒久化
- ⑤ 規定を変更・私物化する者の処罰(市(ここではアルテミスの化粧)と皇帝への罰金)
- ⑥ 金銭の管理方法の承認

[ヘレニズム世界とは？]

- ・アレクサンドロス大王の征服活動により、東地中海・オリエント一帯(ギリシア人植民の進んだ南イタリアや西地中海も含む)に国際言語としてのギリシア語・ギリシア文化の登場。これらの「ギリシア語・ギリシア文化」は商業・外交・宗教・学問などの諸々の表現を担う言語となった。

また、古代世界では機能別の言語の使い分けが盛んであった。(cf. アケメネス朝時代ではアラム語・フェニキア語が国際商業での共通語であった)

- ・それまで小アジア・シリア・ギリシア・マグナ＝グレキア(南イタリア)・エジプトなどの個々の地方で個別に育まれてきた学知・文化・宗教に新たな表現形態が与えられる。(商業語に留まったアラム語・フェニキア語をさらに上回る広範囲な使用範囲)
- ・言語だけでなく、彫像・貨幣・碑文なども一種の共通「言語」として流布。
- ・各地の宗教もこの共通「言語」をもとに新たに描写されるようになる。

[エフェソスの「アルテミス」崇拝とヘレニズム]

・従来、小アジアではキュベレーをはじめとする地母神信仰が盛んであった。この信仰はギリシア人植民以降に現地のギリシア人の信仰(いわゆる「ギリシア神話」と混合していく。そして、ヘレニズム時代の到来によりエフェソスでは地母神・豊穡の神とされていた神が「ギリシア文化」によって再構成されることにより、「アルテミス」として崇拝されることとなり、こうして「異形の女神」である「エフェソスのアルテミス」の信仰が確立された。これはヘレニズム世界での宗教的シンクレティズムの一端とも考えられる。



左からキュベレー像・ギリシアでの一般的なアルテミス像・エフェソスのアルテミス像

第三・四回(5/12・5/19)

テーマ:元首政期ローマ支配下のギリシア都市——エフェソスを事例に

配布史料:ガイオス＝ウィビオス＝サルタリオスによるエフェソスのアルテミス祭祀

(配布史料については別途「歴史Ⅰ 第二回史料脚注」を活用してください)

[時代・文化としてのヘレニズム]

(1) 時代区分としてのヘレニズム

アレクサンドロス大王の征服活動(前 330 年代)からプトレマイオス朝エジプト滅亡(前 30 年)まで

一方で「文化」としてのヘレニズムは東地中海～中央アジアに至る広い地域で 7 世紀 (イスラームの伝来) までは強い影響を持ち続けた。また、一部はイスラーム世界に継承、または東アジアや南アジアに伝播した。

例えば、北インド発祥の仏教もクシャーナ朝 (1-3C)・グプタ朝(4-6C)などのもとの**仏教美術** (ガンダーラ美術・グプタ美術) の表現形態を得る。

(2) ローマの東地中海進出 (前 2 世紀中葉～)

ローマによるヘレニズム諸王国(マケドニア・シリア・エジプト)にかわる新たな覇権国家による支配

ギリシア文化のローマへの流入が加速→ヘレニズム文化圏での国際共通語であるギリシア語をローマ人も使用



(cf.ホラティウス『征服されたギリシア人は、猛きローマを征服した』)

ローマの公用語であるラテン語は公文書・行政官の命令などのごく一部に限定 (なお、ガリア・ヒスパニアなどではラテン語が依然として卓越する)

(3) ヘレニズムの柔軟性・許容性

ローマ(異民族)による属州支配(それは必ずしも安逸なものではなかったはずである)をヘレニズム文化の枠組みの中で再構成する

→ラテン語ではない、ギリシア語 (東地中海の国際共通語) でローマ文化を表現

[サルタリオス規定の中のローマ的要素]

- ・皇帝トラヤヌス、皇妃プロティナ、州総督・副官
- ・「騎士身分」のガイオス＝ウィビオス＝サルタリオス

→praenomen(個人名)/nomen(氏族名)/cognomen(家名)を持つのでエフェソス人(ギリシア人)かどうか疑わしい。先祖はイタリア半島からわたってきた可能性が高い。また、「騎士身分」であることはローマ市民権保有者であることを示す。

※古代地中海世界の人名については扱いが難しいため、以下で一定の説明を行う。

- ①ギリシアでは基本的に人名は単一の要素で表現される。場合によっては出身地などをつけて区別し、「○○(地名)の××」と表現する

(例:ピタゴラス、プラトン、カイサリアのエウセビオス、ナジアンゾスのグレゴリオス)

- ②ローマ文化圏では人名を複数の要素から表現する。

王政初期(前 8～7 世紀)はギリシアと同様にローマ人も単一の要素で表現される名前であったが人口の増加とともに氏族名(nomen)を個人の区別のために用いるようになった。(この背景としては当時のローマは領域として狭く、地名による個人名の区別に不向きであったことと、ローマ人の人名パターン自体が少ないことが考えられる。) また、共和政期には個人のあだ名や氏族名から発達・派生・世襲化した第三名(cognomen)を用いるようになった。

また、第三名が世襲化・固定化したために本来の意味を失った後、第四名(agnomen)が生まれた。第四名は名前というより称号に近いものであり、出生地や本人の業績に由来する場合が多く、第三名と異なって世襲されることは稀である。第三名までが完全に同名の場合は Minor(小)や Maior(大)で区別する。

なお、ローマ文化圏の女性は固有名を持たず、父親の氏族名の女性形を通称として用いていた。

- ・元老院とローマ人騎士身分とローマ人市民団の肖像
- ・ティベリオス＝クラウディオス＝ユリアノス
→おそらくこの参事会議長はローマ市民権保有者である可能性が高い。そうだとすれば彼はローマとエフェソスの「二重国籍」状態となる。
- ・「スブラノスが二度目にしてマルケルスが執政官の年の 1 月…、ユリアノスが議長年のポセイデオン月」
→ローマの記年法とエフェソスの記年法の併用

[サルタリオス規定の中の肖像の取捨選択]

・全肖像 29 体

→皇帝夫妻の肖像をのぞけば 27 体

→アルテミス像+エフェソスの英雄+部族 (×9 で 27 体)

→アウグストゥス・リュシマコスなどのエフェソスに貢献した英雄
(ミトリダテス 6 世やアントニウスは敗者なので反映されない)

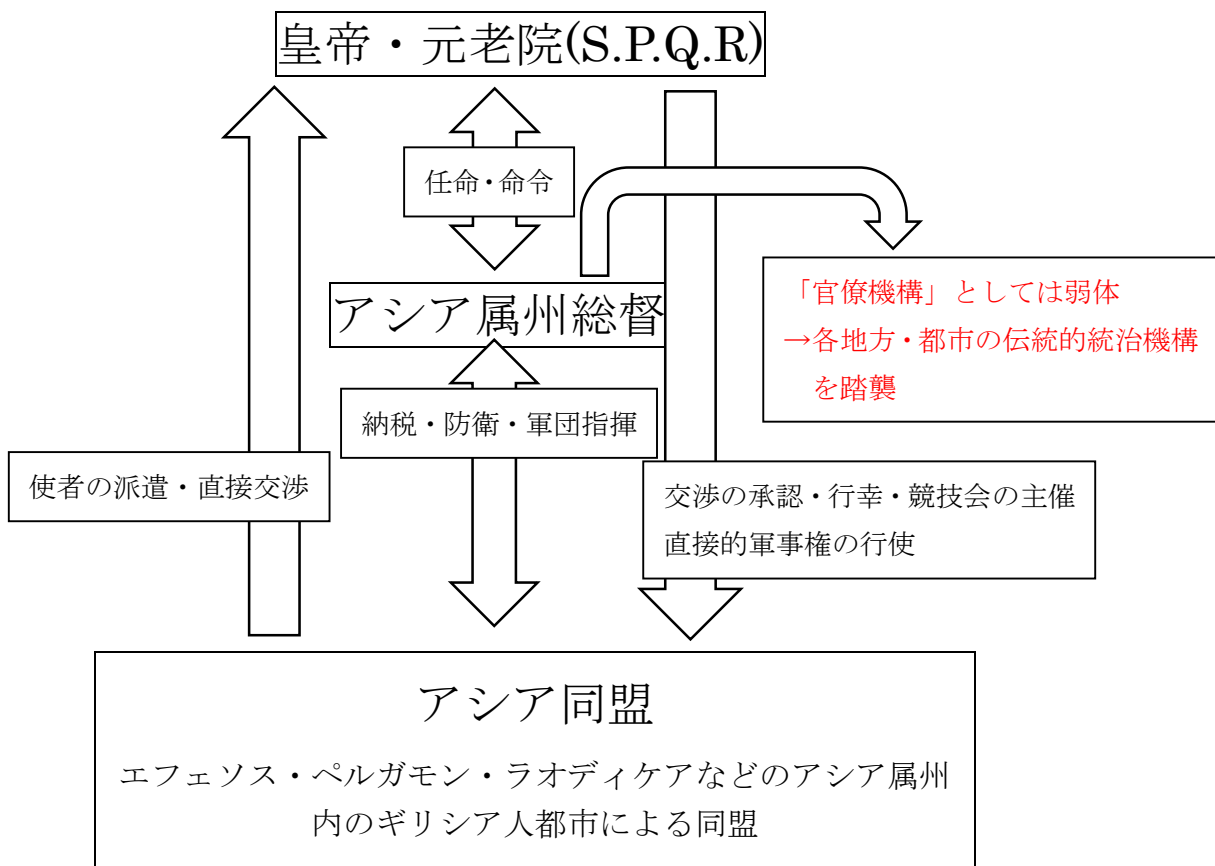
・皇帝崇拜

→皇帝の裸像を制作する (裸像はギリシア世界においては神や神格を持つ英雄に飲み許されるため、皇帝の裸像を作ることで皇帝への絶対の忠誠を示す)

※ なお、古代ローマ世界ではユリウス・カエサルやアウグストゥス帝以降の皇帝は往々にして神格化(apotheosis)された。このプロセスは大きな業績を上げた皇帝のみに対して行われ、後継の皇帝の主導の下で「元老院およびローマ市民 (S.P.Q.R*)」の承認の下で行われるイベントであった。また、このイベントは前皇帝の施政に対する総括の意味も含む「恒例行事」であった。ちなみに、キリスト教徒は皇帝崇拜を拒否したために迫害を受けた。

*S.P.Q.R とは Senatus Populusque Romanus(元老院及びローマ市民)の略

[都市の国際関係]



・都市の自治構造

政治主体

都市参事会員…参事会で都市政治を主導

都市市民(土地所有者)…市民権保有者で民会を構成。部族(自治体)として再編成。年齢ごとに組織(青年団・長老会など)

政治不参加の住民

女性・奴隷(解放奴隷)・在留外人

農村住民

土地所有者(都市市民)…参政権を持つ

小作農・奴隷…参政権を持たず、都市への食糧供給に従事。

・「パクス＝ロマーナ」という支配体制

前頁の図にある通り、ローマ帝国の属州支配体制は必ずしも強固なトップダウン式当地ではない。むしろ、**属州現地の各地方・都市の統治機構を継承した。そして、帝国本国は(圧倒的な)軍事力によって属州内の治安維持にあたり、紛争への抑止力となっていた。**

また、ローマによる属州化後に、ローマの植民市が属州内につくられることがあった。こうした植民市の住民の多くはローマ軍団勤務を満期除隊したもの(*1)やアウクシリア(*2)勤務でローマ市民権を獲得した属州民であり、軍団の駐屯基地や属州の防衛拠点、街道の中継地としての機能を担った。

*1 ローマの軍事は「武器自弁の市民兵」によって担われたと思われがちだが、この制度は王政期の伝説的な王、セルヴィリウス(在位前 578~535 年)によって整えられ、ポエニ戦争前後に若干の改変を加えられながらも堅持されていた。しかし、ポエニ戦争後に属州化したシチリア・ヒスパニア(スペイン)から流入した安価な穀物がローマ国内の農業にダメージを与え、兵士の主要な供給層であった農民(土地所有階級)が困窮して流民化した。これによりセルヴィリウス以来の軍事制度が崩壊に向かったため、前 2 世紀の将軍マリウスは軍制改革を行い、徴兵制を廃して志願制としたほか、軍団兵の任期を 25 年とした。つまり、ローマ軍団を完全に「職業軍人」化したのである。

*2 マリウスの軍制改革以降、ローマ市民で構成された正規軍(レギオー)に対して補助的な役割を果たした部隊のこと。ラテン語の「助っ人」に由来する。アウクシリアは主に非ローマ市民の属州民によって構成され、騎兵の供給や兵站の管理などを受け持った。任期は正規軍の兵士と同じく 25 年であり、任期満了後は退職金もしくはローマ市民権が与えられた。

[恵与のメカニズム(エヴェルジェティズム)]

- ・富裕者から同胞市民への恩恵施与→**個人が提供**

例) 建築物(劇場・浴場・列柱廊・噴水など)

食品や金銭の無償供与

見世物(競技会・剣闘士試合など)

→「パンとサーカス」

- ・施与者への感謝・報恩

(1) 参事会への編入

(2) 施与者の彫像の建立・冠・特別座席などの名誉

cf.)「決議(A)」L39~42 を参照

→**名誉の授与によって都市が施与者を「招致」**

施与者も「名誉」を獲得し、立身出世に役立てる WIN-WIN 関係

- ・恩恵者間の施与競争

→他人よりも派手な恩恵施与を行う＝より大きな名誉を得る

→**都市間での「恩恵者獲得競争」**

- ・結果

→ローマをはじめとする地中海世界一帯での**都市インフラ・大理石建築の発展**

→これらの多くは現代まで残り、世界遺産ともなっている

- ・時代背景

(1) 「パクス・ロマーナ」の下での**比較的安定した経済活動**

(2) 大理石などの建材や人的資源をはじめとする**物品の流通網や交易路の確保**

(3) **安定した産業活動・交易の発展と余剰資金**

(4) **貨幣経済の進展**

(5) **地方・都市の自治の存在**

→これらにより、都市の大規模な発展がみられ、過剰なまでの建築活動が行われることとなった。

[「名誉の帝国」]

- ・**帝政初期までには出世パターンの確立(クルスス・ホノルム)**

→執政官に当選するまでの一定のルールが確定

→安定した社会を背景とする

- ・地方都市(主にギリシア)

都市参事会員・哲学者・**ソフィスト(*)**・**神官**が主にエリートとされる

*ソフィストは本来は弁論術を教えることで金銭を得る職業に就くもの全般を指す。ローマ帝政期のソフィストはギリシアで前 5 世紀ごろに発達したそれとは異なり、哲学的な弁論のパフォーマンス的な要素が強調されている。(堀尾耕一『哲学的弁論術と第二のソフィスト術』(『ギリシャ哲学セミナー論集』XI 2014 所収)より)



トラヤヌス浴場

第五回(5/26)

テーマ:帝政前期の宗教①——ルキアノス『偽予言者アレクサンドロス』より

配布史料:ルキアノス(高津春繁訳)『偽予言者アレクサンドロス』

(配布史料については別途「歴史 I 第四回史料脚注」を活用してください)

[都市のシンボルとしての宗教]

- ・偽予言者アレクサンドロスの出自(配布史料 p.108~111 を参照)

(1)出身はアボーノティコス(p.110)

アボーノティコスはアナトリア半島の黒海沿岸、パフラゴニア地方に位置する地方都市であった。この地域は前3世紀はじめに成立したポントス王国の支配を受けたのち、前1世紀にポントス王国がローマの属国になり、紀元後64年にネロ帝のもとでポントス属州として帝国に編入された。この歴史を見ればわかるようにアレクサンドロスの生まれたアボーノティコスは帝国の中でも後進地帯であった。(この点、ヘレニズム以前からの繁栄を謳歌していた小アジア最大級の都市、エフェソスとは違う) また、アボーノティコスという名も地元の無名の英雄に由来するものであった。



(2)母系の先祖をペルセウスとする(p.111)

当時のローマ・ギリシアの貴族の間では先祖を神話の英雄に擬する風潮があった。(*1)ここから、アレクサンドロスの母親の先祖は没落した貴族ではないか?という推測成り立つ。

*1 例えば、前1世紀の政治家であるガイウス・ユリウス・カエサルはユリウス氏族の出身であったが、ユリウス氏族は自らの出自を、女神アフロディテの子である英雄アイネイアスの子孫だとした。なお、ローマの伝説的な建国者であるロムルスもアイネイアスの子孫だといわれる。

(3)医師と公称する男を師匠とする(p.108)

アレクサンドロスは若いころ、医師と公称する男を師として薬の調合を学んだ、という記述がある。この「医師」はテュアーナのアポローニオス(1世紀の有名な宗教者・修行者でイエスと同時代人であったことから反キリスト教主義者に「異教徒のイエス」として崇拝された)の関係者であった。

(4)ビザンティオン出身の合唱隊歌作者との協力(p.108)

これによって「神託作り」に必要な韻文の技術を手に入れることとなる。

・アポーノテイコス拡大→「宗教」による都市の発達

- (1) カルケドンのアポロン神殿で発見された青銅版をきっかけに神殿建立決議(p.110)
- (2) 噂が広がるとともに大勢のパプラゴニア人（小アジア北部地方）がたちまちの中に馳せ集ってくるだろうと期待しながら——これは実際にその通りになった(p.113)
- (3) 州総督ウェリアーヌスの神託伺い(p.120)
- (4) 神託の赫々たる 噂がイタリアへと広がり、ローマ市に侵入した時、踵を接して押寄せぬ者としてなかった。(p.122)
- (5) シリア語・ケルト語の通訳(p.133)→多国語に通曉したエリートが存在

→宗教活動を通じて後進地域の田舎町であったアポーノテイコスが発展していく

→「(p.137)アポーノテイコスなる名を変更してイオーノポリスと呼び、新貨を打つことを皇帝に願うこと」

→この企ては成功し、田舎町のアポーノテイコスは「イオーノポリス(イオンの町)」と名を変え、現在にその名を伝えている。なお、現在のトルコ共和国内の「イネボル」はイオーノポリスに由来する。また、グリュコーンを象った貨幣も実際に発行された。



[近隣都市との合従連衡]

- (1)エピクロス派(*1)の偽予言者アレクサンドロスへの反発(p.118)

→ポントスは無神論・キリスト教に満たされると脅迫

*1 エピクロスは無神論的とも取れる立場から、死をすべての感覚の消滅だと考え、死の苦痛や死後の審判などを恐れる必要はなく「平静な心(ataraxia)」を持つべきだと説いた。また、精神的な幸福の追求を主張し、度を越した快楽・欲望は結果的に不快をもたらすとして批判した。

- (2)テリオスのサケルドス・アマストリスのレピドスとの接触(p.119,128)

→どちらも近隣都市の有力者であり、ここから近隣都市と協力関係または敵対関係を築いていることがわかる。なお、アマストリスのレピドスはアレクサンドロスに敵対的立場をとるエピクロス派である。

- (3)ポントスとパプラゴニアから貴族の子弟を集める(p.127)

→近隣都市の有力者との協力関係

- (4)クラーロスやディデュモイ(=ブランキダイ)やマロスの神託所に「顧客」を斡旋(p.121)

→いずれも小アジアの有名な神託所。神託所同士の連携関係を確立

- (5)プラトンやクリュシッポスやピュータゴラス派の人々は彼の友(p.119)

→エピクロス派とは敵対する一方でプラトンやクリュシッポス(ストア派)、ピュータゴラス派とは協力した。なお、エピクロス派以外の三派は哲学の学派でありながら神秘主義にある程度傾斜していた。

[神託とは？]

神託…神殿などの神託所から出される 韻律に沿って書かれた文章で、神の言葉とされる。

→おもに意味不明・解釈が多岐にわたることが多いが、古来より伝統的にギリシア人を中心に広く支持されていた。神託所は人が多く集まることから金融や市場などと複合した経済的な中心地となった。

Ex)ローマ軍とクラウスの神託(配布史料第五回を参照のこと)

「クラウスのアポロン神託解釈に従って男神たち女神たちに〇〇大隊(coh.)が(この奉納碑を捧げる)」

→ブリタニア・北アフリカ・サルデーニャで同じ碑文が出土

→ローマ皇帝(ローマ帝国軍総司令官)が神託に対して各部隊に奉納を指示か？

→このようにローマ皇帝ですら神託に一定の敬意を払っていたことがわかる

[帝政期の哲学諸派]

・中期プラトン主義

→アスカロンのアンティオコス(前1世紀中葉)以降、ローマ帝政期の代表的著作家はプルタルコス(代表作「対比列伝」)

→懐疑主義(*1)から離れた形而上学的世界理解(従来のプラトン主義は懐疑主義が中心)

*1 懐疑主義とは、「絶対的」な普遍原理を懐疑的にとらえ、「独断」による世界認識を排除しようとする思潮のことである。場合によっては不可知論(人間による世界の本質認識を不可能だと断ずる)

・ストア派

→ゼノン(前3世紀初め)を祖とする。思想体系はクリシッポス(前3世紀中葉)によって整理される。命題論理や自制心・克己心を究めることに主眼が置かれるが、決定論・運命論的側面や終末論を唱えていることもあり、神秘主義的要素をある程度含んでいた。

・エピクロス派

→エピクロス(前3世紀初め)を祖とする。精神的な安寧の希求と精神的な苦しみ克服を説く。形而上的な存在(「神」を含む)による現世への干渉を否定、「神的世界」と「現世」を分離。原子論的な立場をとる。

[ローマ帝国への影響]

(1)ルティリアヌスの支持

ルティリアヌスは元老院議員で、執政官(補充執政官)や属州総督経験のある名士中の名士であった。このような有力者の支持を得たことはアレクサンドロスの帝国内での影響力増大に大いに役立った。

(2)マルクス帝(マルクス・アウレリウス帝)の神託伺い(p.131)

マルコマンニ戦争時にマルクス・アウレリウス帝がアレクサンドロスの神託所に神託伺いを行ったとされるが真相は不明。皇帝自身の指示でない可能性もある。

(3) ビテュニア＝ポントス属州総督アウィートゥスの裁判拒否(p.137)

アウィートゥスはどちらかといえばアレクサンドロスよりも同輩のルティリアヌスに配慮した形だが、アレクサンドロスの活動したパフラゴニア地方を統治する総督としてはルキアノスの告訴とはいえ、属州全域で広く支持を集めるアレクサンドロスに対して思い切った対応をとれなかった可能性が高い。

[アレクサンドロスの神話体系]

→従来の神話とは異なる神話を創作

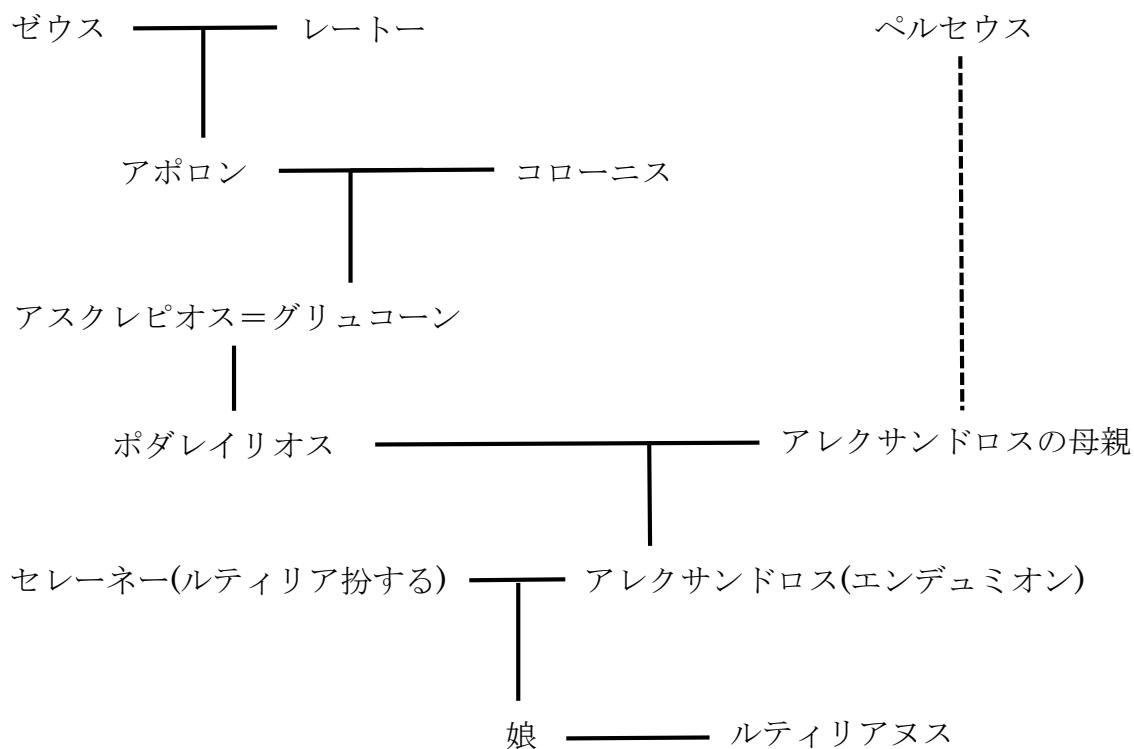
→こうした「**フレキシビリティ**」や「**包容性**」がヘレニズムの特徴である。

Ex) アポロン…**神託・音楽・医療**の神

→「神託」の要素を司りアレクサンドロスの宗教の根幹を占める神となる

→「イオーノポリス」の名は「イオンの町」という意味であるが、この「イオン」はアポロンの息子にあたる英雄である。

なお、ギリシア人の部族「イオニア人」と同じ由来である。



[ピタゴラスとアレクサンドロス]

p.107,p.123,p.127 にピタゴラスに関するアレクサンドロスの言及がある。

「彼の太腿がわざと露出せられて、金色であることを示されたことがしばしばであった。

(中略) 黄金の太腿を持っているから、彼はピュータゴラスの魂か、あるいはそれに類するほかの魂を持っているのかという議論をして、」

→ピタゴラスは「黄金の太腿」をもっているという特徴があったとされている。

→アレクサンドロスは自らの「黄金の太腿」を根拠に自らをピタゴラスの転生した存在とした。輪廻転生説自体はプラトン『国家』等にもみられる思想である。

また、ピタゴラス学派自体が「数」をアルケー（万物の根源）とする宗教結社の性格を持っており、共和制後期～前期帝政期ローマでは空中浮遊・瞬間移動・降霊術を含んだ**神秘主義・呪術的な新ピタゴラス主義**が出現した。新ピタゴラス主義者は自らを「ピタゴラス派」と自称したという特徴がある。著名な哲学者にはニギディウス・フィグルス（前1世紀）やテュアーナのアポローニオス（1世紀）がある。後者は p.108 にその言及があり、アレクサンドロスの1世代前の宗教家として有名で、アレクサンドロス個人にも影響を与えた可能性が高い。

[アレクサンドロスの宗教に見られる秘儀的要素]

秘儀(Μυστήρια)…古代ギリシアで見られる神秘主義的・**秘密主義**的な祭儀のこと。

アレクサンドロスの宗教にも以下にあげられるような秘儀的要素がみられる。

- ・「お直声」「接吻内の人々」による神託の制限(p.120)
- ・「夜の神託」の説明者の限定(p.127)
- ・「炬火祭及び神官の位階」の設置

→**エレウシスの秘儀**を模範とする。エレウシスの秘儀については「第四回史料脚注」を参照のこと。

→神託・秘儀・治癒・哲学的説教などの既存の**カリスマ的要素**を織り込んだ宗教

→**初期キリスト教をはじめとした帝政期の新興宗教の特徴**

[帝政前期社会に見える帝政後期社会の萌芽]

- ・**皇帝を中心とした名誉志向の発達**

安定した社会・政治のもとでローマ社会における出世の階梯（クルスス・ホノルム）が確定しつつあった。富裕な市民にとって執政官をはじめとした政務官に当選し、元老院入りするために、「恵与」をはじめとする名誉・支持獲得競争をさかんに行った背景があった。

- ・**地方エリートによる新宗教の採用と町の発展・他都市の団体との連帯**

アレクサンドロスにみられる新宗教は町の発展に結びついた。また、彼はアマストリス

のレピドスやテイオスのサケルドスのような他都市の支配層と合従連衡関係を結んだ。

- 秘儀・神託・予言といった要素

帝政前期の宗教は後世の「世界宗教」にみられるドグマティックな要素よりも秘儀・神託・予言といったカリスマ的要素を多く含んでいた。これは後に「世界宗教」の一翼を占めるキリスト教も例外ではなかった。

- 克己心にあふれ、権力や世間体を気にせず、「死後」への精神的修業を尊び、肉体的快楽を卑しむ気風

これは主に次回以降に解説する範囲に含まれる。グノーシス主義や初期キリスト教・マニ教のように現世を「相対化」し、死後における救済を目指して精神的修行に励む諸宗教が勃興したのは確かである。

第六・七回(6/2・6/9)

テーマ:帝政前期の宗教②—キリスト教・グノーシス・マニ教

配布史料:『創世記 6:1-3』『第一エノク書 6-7』『異端駁論 I 25:6』『三体のプロテノイア』

[初期キリスト教の発展—ガリラヤからローマへ]

- ・「初代教会(紀元前後～4世紀末)」の成立

イエスの死後、12使徒(イエスの直弟子たち)を中心にエルサレムに原始的なキリスト教会が成立した。(1世紀中葉)

西暦70年前後に最初の福音書である『マルコによる福音書』が成立。以後、多種多様な「キリスト教」文書が出現し、「ユダヤ教イエス派」から「キリスト教」へと変化を遂げていく。

- ・パウロによる伝道

パウロ(紀元前後～65年頃)は元々、小アジアのタルソス生まれの熱心なパリサイ派ユダヤ教徒であり、キリスト教徒と敵対していたがイエスの死後にキリスト教に回心し、熱心な伝道活動を行った。65年頃にローマ皇帝ネロによるキリスト教迫害に巻き込まれて殉教した。パウロの伝道やキリスト教の拡大にはそれを可能にした背景があった。

(1)アンティオキア教会の設立

アンティオキアはセレウコス朝シリアの首都として建設され、シリアの中心都市・交通の要衝として、また、ローマ・アレクサンドリアに次ぐローマ帝国第三の都市として繁栄を誇っていた。この大都市に教会を設立したことでシリア・小アジアへの伝道が進んだ。また、「キリスト教徒」という呼称が初めて使用された(従来のユダヤ教徒との明確な区別がなされた)のはアンティオキアでのことであった(*1)。

*1「そこでバルナバ(イエスの弟子・パウロの同行者)はサウロ(パウロと同一人物。パウロのユダヤ名)を捜しにタルソ(タルソス。パウロの出身地)へ出かけて行き、彼を見つけたうえ、アンテオケ(アンティオキア)に連れて帰った。ふたりは、まる一年、ともどもに教会で集まりをし、大ぜいの人々を教えた。

このアンテオケで初めて、弟子たちがクリスチャンと呼ばれるようになった。」(使徒行伝 11:25-11:26)



(2)地中海世界に広がるユダヤ人コミュニティ

バビロン捕囚からヘレニズム時代に至る数百年間で多くのユダヤ人が傭兵活動・商業活動を通じて地中海世界各地にコミュニティを築いていた。中でも傭兵活動は傭兵としての任期满后にローマ市民権や植民市の住民として土地を獲得できる(屯田兵のようなも

の)ため、ローマ市民権を得てローマ人に同化していったユダヤ人も多い。なお、パウロはパリサイ派ユダヤ教徒でありながらローマ市民権を保有していた(=ローマ帝国内で一定のエリート層だと認識された)ことも伝道に役立った。

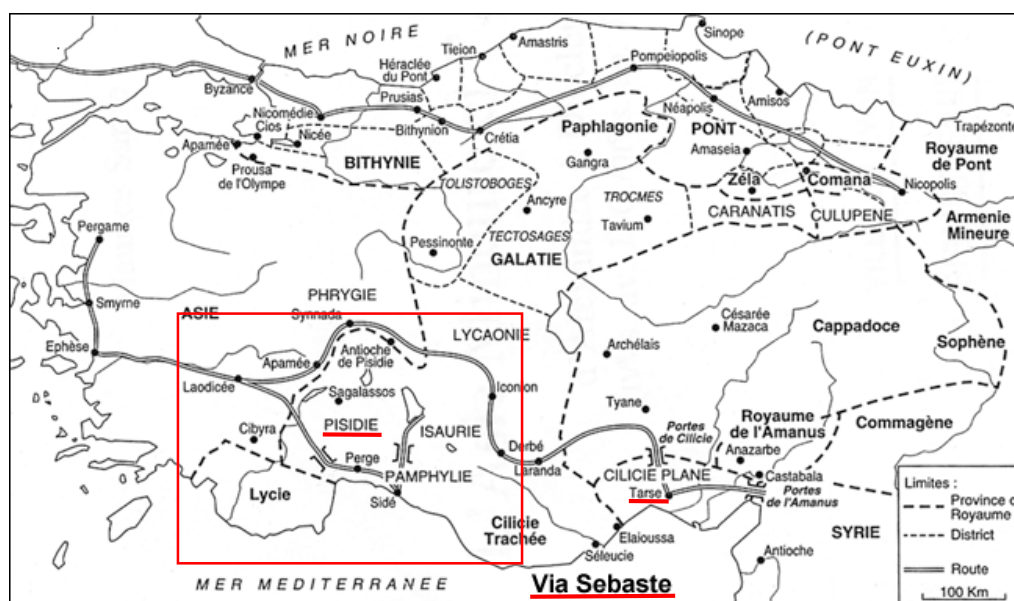
(3)ローマの張り巡らした街道網

ローマ帝国は本国のみならず、属州にも広範囲に道路網を張り巡らした。その中には人や物資の移動以外に、本国から軍団を速やかに紛争地に送り込むといった役割も含まれていた。この街道網もパウロの伝道に大きく役立った。パウロはローマ市民権保有者であり、属州のエリート層に属していたため、通行の安全や移動の便宜を属州総督に図ってもらっていた可能性が高い。

この一例として、46年から49年に行われたパウロの伝道(使徒行伝13:4-14:28)について触れる。パウロはバルナバとともにキプロスから小アジアに向かい、パンフィリア(Pamphylia)地方の中心都市であるペルガ(Perga)に上陸し、陸路でピシディアのアンティオキア(シリアのアンティオキアと区別される)に向かっている。この際に Via Sebaste(アウグストゥス街道)を通っている。Via Sebaste は山がちで



交通が不便な小アジア中央部(下図 PISIDIE の部分)の統治を効率化するためにアウグストゥス帝時代に建造された道路である。この地域はパウロの出身地であるタルソスにもほど近く、パウロにとっても地縁があったと思われる。



(4)パウロの伝道の特徴

- 主に**富裕層・貴族**が対象(ローマ市民権を布教に活用)
- 非ユダヤ教徒(異邦人)**への伝道が中心。ユダヤ教的な律法の遵守を求めない。

[ヘレニズムでの布教]

- ・『旧約聖書』のギリシア語訳→**ヘレニズム文化圏の公用語であるギリシア語**を用いた布教
七十人訳聖書(Septuaginta)の編纂(前3世紀中葉、プトレマイオス朝エジプト*1にて)
他に、シノペのアクィラス(アキュラ)・テオドティオン・シュンマコス(エビオン派*2)による『旧約』のギリシア語訳が知られる。

*1 プトレマイオス朝はアレクサンドロス大王の部下がエジプトで独立し、建てた王国であるため、支配層はギリシア人であった。

*2 エビオン派とは2世紀頃に出現したキリスト教の一派で「養子的キリスト論」を特徴とする。彼らはイエスのアプリオリ的な神性や聖母マリアの処女懐胎を否定し、イエスがバプテスマのヨハネによって洗礼を受けた時に「神の子」として神性を獲得したと主張する。その構成員のほとんどはユダヤ人キリスト教徒であったとされる。

→なお、メソポタミアやパレスティナではヘブライ語やアラム語での布教も行われた。

[初代キリスト教の留意点]

(1)**秘儀的宗教**

- 個人の子弟における会合・特殊な入信儀礼・聖体拝領・「兄弟」「花嫁の部屋」などの隠語の使用
- 異教徒への秘密主義的態度**

(2)**専門的・カリスマ的聖職者の活動**

- 都市ごとの固定化された「教会ー司祭」関係ではなく、**各地を遍歴する説法者や悪魔祓い師**らによる「**呪術**」「**治療活動**」などのパフォーマンスによって**信者を獲得**し、教団を維持した。
- 同じ帝政前期の宗教として「**偽予言者アレクサンドロス**」とさまざまな類似点がある。

(3)**多数の福音書・行伝・黙示録・書簡**

- 現代キリスト教の『新約聖書』27文書(カトリック)がほぼ確定し、現在の形になったのは367年の『アタナシオスの第39復活祭書簡』を経て、397年の第3カルタゴ教会会議である。
- つまり、それ以前にはキリスト教の使徒・聖人の名を用いた文書が多数流布し、何をもって「正典」となすかについては教派・教会ごとにさまざまであった。こうした流動性や可能性は初期キリスト教の重要な点であり、神話の自由な解釈がある程度可能であったヘレニズムの影響を初期キリスト教も色濃く受けていたことを示す。

[キリスト教とヘレニズムの接触]

・第二次ソフィスト運動

→1世紀頃から現れるギリシア文化のブーム(「ギリシア・ルネサンス」という研究者も)

(cf. <http://greek-philosophy.org/ja/files/2014/03/Ronshu2014Horio.pdf>

堀尾耕一『哲学的弁論術と第二のソフィスト術』(ギリシア哲学セミナー論集 XI, 2014 より))

→ギリシア文化を愛好したハドリアヌス帝(位 117-138)のもとで興隆する

→他にもパンヘレニックなギリシア都市同盟を構築

・『新約聖書』のギリシア語底本のギリシア語が稚拙

→2世紀末からギリシア語・ラテン語の素養に優れた社会的上流階級による著作

→カイサリアのオリゲネス(c.182-251)、リヨンのエイレナイオス(c.130-202)など

→聖書の比喩・寓意的解釈・ギリシア哲学(新プラトン主義(*1)の流出説(*2))などのヘレニズム的要素の導入

→2~3世紀にギリシア語でのキリスト教関連著作を行った作家をギリシア教父と呼ぶ

*1*2 新プラトン主義はプラトン主義・中期プラトン主義の流れを汲んだ思想で、多分に神秘主義的要素を含む。思想はアンモニオス・サッカス(3世紀中葉)やプロティノス(c.205-270)によって提唱され、「流出説」を基本とする。「流出説」は高次・清浄な世界に存在する「大いなる一者」からの流出・派生によって万物が生まれ、「流出」の過程を逆行することで靈魂を高次・清浄な世界に導くことができると唱える説である。この思想はアウグスティヌスにも影響を与え(彼は一時期新プラトン主義に傾倒した)、キリスト教神学の中で「一者」が「父なる神」に擬せられていく一方で、グノーシス主義の神話にも影響を与えた。なお、ここで着目しなければいけない点はプロティノス自身が主著の『エンネアデス』でグノーシス主義を批判している点である。グノーシス主義は「世界・輪廻からの脱出」を唱える一方、プロティノスはあくまで「世界・輪廻の枠組みの中での靈魂の高次化」を唱えている。

[グノーシス]

・原義はギリシア語の”Γνῶσις (Gnosis)”で「知識」を意味する

→定義づけは難しい

→従来は「キリスト教の一教派」という位置づけをなされた時代もあったが、「キリスト教」の枠にとどまらない多様な宗教集団だという定義が現在では最も有力である。

・聖書に加えてギリシア哲学・ヘレニズム文化の知見も加えた神秘主義的神話体系

→プラトン主義・新プラトン主義にゾロアスター教・エジプトの宗教さえ包含する

→ギリシア哲学+キリスト教・ユダヤ教思想+ヘレニズム文化のシンクレティズム

→「反宇宙的二元論」を中心的教義とする

・「反宇宙的二元論」とグノーシスの神話観

→「宇宙・星辰(惑星)・造物主」などの「現世」を支配していると思われていた絶対的存在を「相対化」し、現世での営為や人間の肉体を「悪」だと断じる思想である。

→造物主(旧約聖書の神)は「至高なる神＝真なる神」からの流出失敗で生まれた「失敗作」であり、「至高なる神」の存在を知らないため、自らの権能を驕り、「世界」「人間」を創造した。これを根拠に「人間」「世界」は「悪」だと断じることが可能となった。

→人間の肉体が「悪」である一方で、「至高なる神」は「救済」の糸口として人間の靈魂に自己に由来する「善」の要素を含めた。

→しかし、現世に生きる人間は「欲望」「肉体」という枷に囚われて、「自己の靈魂(＝本来的自己)」に含まれる「至高なる神」の「善」の要素を知覚することができない

→したがって、従来の「造物主」への帰依では死後に「救済」を得ることはできず、現世に転生して再び「肉体」という枷に拘束される

→死後において「救済」を得るためには「造物主」への信仰ではなく、「自己の靈魂(＝本来的自己)」に含まれる「至高なる神」の要素に目覚める(＝グノーシス＝「知識」)することで輪廻から「解脱」し、真の「救済」を得ることができる

・否定神学的な宗教観

→「至高神」を「～無い」という形容を多用して表現することで、「人間の尺度」では測れない「至高なる神」のイメージを表す

単一性とは単独支配のことであるから、さらにその上に支配するものは存在しない。それは真の神、万物の父、聖なる霊、万物の上にあって見えざる者、不滅性の中にある者、純粹なる光一すなわち、いかなる視力でも見つめることのできないほどの光一の中にある者である(ヨハネのアポクリュフオン第6節)

この彼(至高神)は生まれることも死ぬこともない者であるがゆえに、「初めも終わりもない者」と呼ばれるにとどまらない。むしろ、始まりも終わりもないことが既にあり方であるように、その偉大さにおいて達しがたく、その知恵において近づきがたく、その權威において把握しがたく、その甘美さにおいて究めがたいものである。(三部の教え第3節)

わたしは見えざる者の思考(筆者注：グノーシス主義の至高神は「自己を思惟する者」)の中にある見えざる者、わたしは測り得ざる者、言い得ざる者の中に顕われてはいるが。私は達し得ざる者、達し得ざる者の中に存在し、あらゆる被造物の中で動いている。

(三体のブローテンノイア第1節)

[グノーシスの代表的事例]

・マルキオン派

マルキオン(c.90-c.160、右図)によって創始される。マルキオンは仮現論(*1)やグノーシス主義的立場、非ユダヤ人に対する差別・非道德的記述から『旧約聖書』を否定し、144年頃に「異端」として破門されて以降は、テキストを「ルカによる福



音書」「パウロ書簡(テモテ・テトス人への手紙を除く)」に限定した独自の「正典」を編集した。マルキオン派の教説に対してはカルタゴのテルトゥリアヌス(c.160-c.220)やリヨンのエイレナイオスが強く反駁したが、彼らの提起した「真理は一つなのになぜ『福音書』は 4 つもあるのか?」という問いに対しては当代随一の教養を誇るギリシア教父たちも論理的な答えを出すことができなかった。

*1 仮現論(Docetismus)は狭義には、イエスの「人間」としての受肉や受難を否定し、人々に「そのように見えた」のに過ぎなかった(イエスはあくまで神的・霊的存在で肉体は「幻」のようなものに過ぎない)とする説である。広義には神的・霊的なイエスが人間に働きかける「インターフェース」として「肉体」を利用したとして「部分的な受肉」を認める説も含まれる。どちらにしてもイエスの身体性を否定する考えで、グノーシス主義に特徴的な思想の一つ。

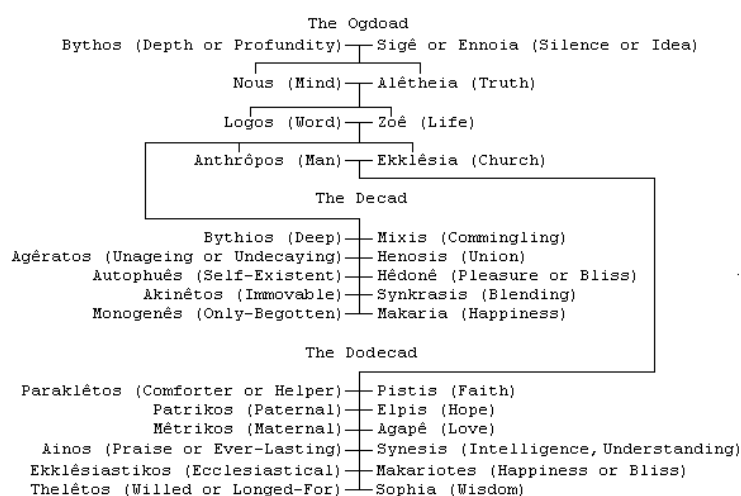
イエスは彼らすべてを密かに欺いた。なぜなら、彼は彼が〔実際に〕(そうで) あったような仕方 (姿) では現われなかった。むしろ、人々に見られ得る仕方 (姿) でこそ現われたからである。〔この〕 者たちすべてに彼は現れた。大いなる者には大いなる者として〔現れ〕た。小さな者〔には〕 小さな者として〔現〕れた。天使〔たちには〕 天使として〔現〕われた。そして人間たちには人間として現れたのである…。(フィリポによる福音書 26:a)

・ ウァレンティヌス派

ウァレンティヌス(c.100-c.160)によって創始される。その特徴は下のような階梯的な宇宙像・創造神話である。その概要は以下に述べるように多神教的であり、この点ではヘレニズム的な宗教観が多分に取り込まれている。また、神話はギリシア語で描写されている。

最初に至高なる神である Bythos(他にもさまざまな呼称がある)からアイオーン(神的存在)たちが流出していき、「オグドアス」呼ばれる 8 体のアイオーン(至高神を含む)が出現した。なお、アイオーンたちは全て両性具有の存在であったが 2 体で 1 対をなしていた。このうち、アイオーン Logos(言葉)・Zoe(生命)の対および Anthropos(人間)・Ekklesia(教会)の対から二次的な流出が行われ、さらに 11 対 22 体のアイオーンが現れた。この時点で 30 体のアイオーンが存在する領域はプレーローマ(超越・永遠の世界)と呼ばれ、また至高神の Bythos を見ることができるのは Nous(精神)のみであった。この時、最後のアイオーン Sophia(知恵)が秩序を

破って Bythos の姿を見ようとしたため、プレーローマは大いに乱れた。Sophia は最終的に自らの雑念を下界(中間界)に捨て、プレーローマの安定は回復したが、中間界に落とされた Sophia の「雑念(=悪)」は「創造神(デミウルゴス・ヤルダバオートと呼ばれる)」として「現世」「人間の



肉体」を創造した。一方で人間の「靈魂」は「創造神」ではなく Bythos に由来するものであり、イエスは人間たちに「靈魂＝本来的自己」を知覚させるために Bythos が遣わした「靈的存在」である。そして人間は「本来的自己」を知覚(＝グノーシス)することで死後に靈魂が Bythos のもとへ回収され、救済されるとする。

・マンダ教

「マンダ」はマンダ語(マンダ教徒が用いる)で「知識」を意味する。(＝グノーシス)

聖典『ギンザー』を中心とした信仰を行う。「流水」に天界からの要素が含まれているとして「洗礼」や洗礼者ヨハネを重視する。(『ギンザー』には「ヨルダン(ヨルダン川)」などの洗礼にかかわる語句が多数登場する)



マンダ教は現在もユーフラテス川下流のイラク・イラン南部に 2000 人程度の信者コミュニティが現存する。

⇒「グノーシス」はキリスト教の一派というよりもローマ帝国・ヘレニズム世界という肥沃な知的・宗教的土壌に生まれた知的な潮流

[グノーシスと「正統教会」の闘い ―正典の固定化―]

マルキオン派以降のグノーシス教派

→多種多様の福音書・聖文書を自派の主張に合わせて使用

→「正統」教会側からの反発、「正典」として使用テキストを固定する動き

cf. ムラトリ断片(Muratorian Fragment、右図)



2 世紀に書かれた「正典」の目録

→「正典」(canon)と「外典」(Apocrypha)、「偽典」(Pseudepigrapha)の区別が生まれる

→当時に大量の「外典」「偽典」文書(「外典」は「正典」に含まれるか議論の末に外された文書、「偽典」は使徒・聖者の名を騙った文書で「正典」に含まれるか議論さえされずに排除された文書)が流布していたことがうかがえる。

→キリスト教公認(313)・キリスト教国教化(392)以降も「正典」の定義については教会会議で検討が進められる

→『新約』⇒『旧約』の順で「正典」の確定化が進んでいく

『アタナシオスの第 39 復活祭書簡』(367)、第 3 カルタゴ教会会議(397)でほぼ成立(東方教会では 10 世紀ごろまで遅れ、コプト教会やプロテスタントなどでは現在でも「正典」

とする文書が異なる)

※ナグ・ハマディ文書(右図)

1945年にナイル川中流のナグ・ハマディで発見された3~4世紀の写本集でそのほとんどがグノーシス主義的な外典文書で占められる。エジプトの修道士会(パコミオス派)がテキストとして用いていた可能性が高い。写本中にプラトン『国家』の一部があることから、ギリシア哲学・プラトン思想の影響が強かったことがわかる。



※「聖書」訳の矛盾への対処

タティアノス『ディアテッサロン(右図)』(c.160-175)

→最初のシリア語訳新約聖書。4福音書を併記。

アレクサンドリアのオリゲネス『ヘクサプラ(左図)』

→七十人訳をはじめとする6種の底本の「旧約聖書」を比較対照



このように、ヘレニズム時代・帝政前期の諸宗教には2つの潮流が読み取れる。

①神話・文献の派生・創作

→偽予言者アレクサンドロスやグノーシス主義に代表されるように既存の宗教・神話にある程度改変・創作することに寛容な土壌が存在した。

↑↓①VS②の対立

②「正典」の選別・固定化、教義の確定

→①の流れに対抗して「正統」とされていた教会・教派による、教義の固定化によって求心力を獲得するという意図が存在した。「正統」から外れた存在は「異端」「外典・偽典」として排斥。

[教会内外の緊張]

殉教者・告白者(証聖者)・遍歴説教者・予言者といったカリスマ的存在への崇拜(ex.フリギアのモンタヌス派*1)

→教会・聖職位階制を否定

→都市を基盤とする定住的司教・教会との緊張

- *1 モンタヌス派は予言者モンタヌスによって小アジアのフリギア地方で創始された。モンタヌス派は「聖霊降誕」と「キリスト再臨」を主張し、原始教会への回帰を説いた。一方で断食や禁欲などの苦行的修行を行った。聖職位階制を否定したため、2世紀末には異端に指定された。

地方慣習の相違による教会間対立

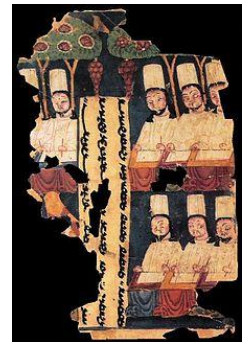
→復活祭催行日をめぐりローマ教皇ウィクトル1世(位 189-199)と小アジア諸教会との対立(リヨンのエイレナイオスによる調停で教会分裂は回避。325年の第1ニカイア公会議で確定)

教義の相違による教会内対立

→アンティオキア司教であったサモサタのパウルス(c.200-275)が異端のモナルキア主義(養子的キリスト論)を展開したため、教会会議で追放されたが、パルミラ(ローマ帝国から半独立状態になっていた)女王のゼノビアの保護のもとに司教位を強引に保持。272年にアウレリアヌス帝がパルミラを滅ぼしたのち、皇帝のもとで裁判が行われ、公式にパウルスは司教を退いた。

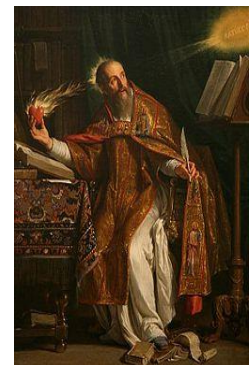
[マニ教]

- ・キリスト教、ゾロアスター教、グノーシス主義、仏教、ギリシア哲学を総合
 - ギリシア・ヘレニズム的思想、シリア・パレスティナからのキリスト教・グノーシス主義、インドからの仏教、土着のゾロアスター教が混じり合うイラン高原で誕生
- ・教祖はマーニー(216-277)。マーニーはユーフラテス川下流地域の出身で元はユダヤ人キリスト教徒であったとされる。
- ・マーニー自身を「セト・エノシュから続く預言者」の系譜(仏陀を含む)に位置づける
 - マーニーは「最後の封印(最後の預言者)」
- ・メソポタミア・シリア・エジプト・北アフリカを中心に信者を獲得
 - のちにはシルクロードを経由して中央アジア・中国にも伝播
- ・戒律を遵守し司牧を行う聖職者と経済的支援を行う一般信者の存在
 - ユダヤ教的



[教父アウグスティヌス(354-430)]

- ・『告白』『神の国』などの著作
 - 中世ヨーロッパの神学・哲学に大きな影響
- ・初期の経歴(354-386)
 - キケロ(ラテン修辞学)の学習⇒新プラトン主義⇒マニ教⇒キリスト教
 - キリスト教回心以前にギリシア・ラテン哲学やヘレニズム的な宗教・思想に広く触れたことが後の著作活動を支えたには



[ユダヤ教]

- ・ローマ以前の略史

ユダヤ人のエジプト移住と迫害→モーセによる出エジプト・十戒

12部族のゆるやかな連帯のもとでパレスティナに定住

→ペリシテ人(「海の民」の一派)やアラム人、フェニキア人などの他民族との接触

→王国時代(サウル・ダビデ・ソロモン)には近隣のペリシテ人を破ってイスラエル王国(ヘブライ王国)を建国

→ソロモン王の死後にイスラエル王国とユダ王国に分裂

→アッシリア・新バビロニア王国により滅亡、「バビロン捕囚」などの民族の危機

→アケメネス朝ペルシアによる解放と民族意識の高揚・民族宗教としての「ユダヤ教」の確立

→アレクサンドロス大王による征服・大王死後にはセレウコス朝の支配下に入る

→マカバイらによる反乱・ハスモン朝ユダヤの確立

→ポンペイウスによる征服(前63)

- ・ローマ帝国内のユダヤ教徒

66-73年 第一次ユダヤ反乱

→ウェスパシアヌス・ティトゥスによる鎮圧とエルサレムの破壊

132-136年 第二次ユダヤ反乱

→バル・コクバによる独立戦争、ハドリアヌス帝による鎮圧

→ユダヤ人をエルサレムから追放・属州名を「ユダヤ」から「パレスティナ」に改名

→ディアスポラ(ユダヤ人の離散)の本格化

- ・ディアスポラとユダヤ教の発展

「神畏れ人(非ユダヤ人のユダヤ教徒支援者)」「非ユダヤ人ユダヤ教徒」の登場

→ユダヤ教の勢力拡大・民族宗教から普遍宗教への脱皮

- ・Patriarchaに代表されるローマとの関係改善

→4世紀にはユダヤ教聖職者への特権や神殿再建が行われる

- ・各地の信者コミュニティの再編

- ・ラビ(ユダヤ教の宗教指導者)たちの知識・律法の再編

→『ミシュナー』の編集(2世紀末)による口頭伝承がメインだった律法解釈の成文化

- ・ローマ社会との文化的融合

→ヘレニズム的表現形式を積極的に採用したシナゴグ建築や共同墓地建設

→12星座や太陽・ギリシア語の使用・「太陽神崇拜」をモチーフとして使用

[ユダヤ教文献の新たな潮流]

- ・ ガリラヤ・バビロニアが新たな宗教的中心地となる
- ・ 「外典」「偽典」の成立
→『死海文書（右図）』に代表される多様な聖典の流布
- ・ ラビたちの知的活動
→作品と時代に応じた分類

(1) Tannaim (1-2C)

(2) Amoraim (3-5C)

(3) Savoraim (6C)

(4) Geonim (7-10C)

※『ミシュナー』は Tannaim 期に属する

- ・ 様々な文献の成立

『トセフタ』

3 世紀末頃に成立。中期ヘブライ語での執筆。Amoraim 期の代表的著作。

『タルムード』

『ミシュナー』の注釈。6 世紀頃(Savorim 期)のものが特に有名。

『ミシュナー』に収録されなかった多くの Tannaim 期のラビたちの発言を多く収録。
パレスティナとバビロニアでそれぞれ制作される。

『ミドラシュ』

律法と聖典の釈義・解説書の総称。Tannaim 期から Geonim 期以降、13 世紀頃に至るまで多くの『ミドラシュ』が制作された。



※タナハ (Tanakh, תנ"ך)

ヘブライ語聖書のことを指し、ユダヤ教では聖典として扱われる。

- ・ モーセ五書 (Torah, תורה)
- ・ 預言者 (Nevi'im, נביאים)
- ・ 諸書 (Ketubim, כתובים)

→キリスト教の『旧約聖書』と本質的には変わらないが、文書の配列がやや異なる。

第八回(6/16)

テーマ:ローマ帝政後期の社会

[三世紀の危機(235-284)]

→「軍人皇帝時代」とも呼ばれたローマ帝国の混乱・衰退期

(1)外圧と皇帝の乱立

帝国東方でのササン朝ペルシア(226年成立)という強大な中央集権国家の台頭

帝国西方でのゴート族などのゲルマン人の台頭

→ローマ全軍の最高指揮官(imperator)である皇帝が単独で帝国各地の軍団を指揮して国境各地の紛争に対応するのが困難に

→属州駐屯軍団・近衛軍団(イタリア駐屯軍)による皇帝擁立

→弱小な近衛軍団(praetoriani)しか持たない皇帝・元老院は対抗できず、結果として 235-284 年の 49 年間で元老院に承認された皇帝だけで 19 人、承認されていない僭称(usurpatio)も含めると 50 人前後の「皇帝」が擁立された

→擁立された「軍人皇帝」の多くは騎士身分出身者(前期帝政期の皇帝はほとんどが元老院議員身分)であり、「実力主義」的傾向が強まっている。

→背景には帝位継承原則の未確立と元老院の権威の弱体化がある

①帝位継承原則の未確立

前期帝政時代の皇帝はあくまでも S.P.Q.R(元老院及びローマ市民)の「プリンケプス(第一人者)」でしかなかったため、「王朝」を持つことはなかった。帝位継承は世襲の場合(セプティミウス・セウェルス帝ーカラカラ帝など)もあれば、皇帝が有能な人物を自身の養子として帝位を継がせる場合(五賢帝時代)もあり、決まった帝位継承法はなかった。これは初代皇帝アウグストゥスが共和政の伝統を崩さない範囲で国家の全権を掌握するためにとった方法が「プリンケプス」となることであり、「王」「皇帝」を直接名乗らなかったことに起因する弱点である。

皇帝は基本的に終身職であり、任期途中での更迭は不可能であったため、無能・不人気な皇帝に対しては暗殺・内戦による帝位篡奪以外の方法が存在しなかった。

②元老院の権威の弱体化

共和政時代の元老院は軍団指揮官などの軍事職を輩出したが、帝政期には軍事の大部分を皇帝と皇帝の任命した騎士身分出身の軍人に依存することとなった。これにより、元老院は軍事的影響力をほぼ失い、強大な軍事力を背景とした軍人皇帝に対抗できなかった。また、その時代のパワーバランスに合わせて多数の軍人皇帝を承認したために市民からの信頼を失った。

→皇帝⇔元老院／イタリア本国⇔属州の関係が崩壊

→身分・権威よりも実力重視の時代の到来

(2)経済の混乱

帝国各地での戦争による軍事費の増加

→貨幣の改悪による打開を図るが失敗し、急激なインフレと貨幣経済の崩壊を招く

帝国内部への異民族侵入による神殿の略奪・海上交易の衰退

→ゴート人が北方から侵入して黒海沿岸のボスポラス王国(クリミア半島のギリシア人国家でローマの属国)を衰退させる

→黒海からボスポラス海峡を突破して地中海に進出・地中海各地の都市・神殿を略奪

→神殿は地中海世界において経済的中心地の役割も果たしていたため、神殿の略奪は地域の経済活動を低下させた



(3)地方政権の自立

→ササン朝ペルシア・ゲルマン人の侵攻に対応するため、帝国の東西で地方政権が独立

→西方：ガリア帝国(*1 右図緑)

東方：パルミラ王国(*2 右図黄)

→274 年にアウレリアヌス帝(*3)が再統一



*1 ガリア帝国は 260 年から 274 年までローマ帝国西方(ブリタニア・ガリア)を支配した独立政権である。260 年にローマ皇帝ウァレリアヌスがササン朝に敗れて捕虜となり、ローマ皇帝の権威は失墜した。間もなく帝位をガリエヌス帝(ウァレリアヌス帝の息子)が継いだものの、帝国各地で反乱・皇帝の僭称が頻発した。その中でも、ライン川下流地域の駐屯軍司令官のポストゥムスはローマ皇帝を僭称しただけでなく、首都をコロニア・アグリッピナ(現：ケルン)に置き、独自の元老院や近衛軍団まで創設した。ガリア帝国は通称に過ぎないが、ポストゥムスの政権が他の僭称皇帝と異なる最大の点はその持続期間である。多くの僭称皇帝は元老院や軍団の支持を得られずにすぐに有力な皇帝の討伐軍に敗れ、その政権は短命であった一方で、ガリア帝国の存在はローマ帝国に半ば黙認された状態で 5 代 15 年も続いた(ガリエヌス帝はゲルマン人・ササン朝対策に忙殺されており、ガリア帝国を攻撃する余裕がなく、またガリア帝国は同じローマ人による地方政権であるため、異民族の侵入に比べて優先度は低かった。)。しかしポストゥムスの死後、ガリア帝国は崩壊へ向かい、最後の皇帝テトリクス 1 世および息子のテトリクス 2 世はアウレリアヌス帝の討伐軍に降伏した。ローマ帝国の元老院議員階級でもあったテトリクス 1 世父子は降伏後も処刑されずに元老院議員に復帰し、テトリクス 1 世はイタリア南部の行政官を務めた。

*2 パルミラ王国は 267 年(実質的には 260 年)から 273 年までローマ帝国東方を支配した独立政権である。260 年にローマ皇帝ウァレリアヌスがササン朝に敗れて捕虜となり、ローマ皇帝の権威は失墜した。間もなく帝位を継いだガリエヌス帝はササン朝ペルシアの脅威に対抗するため、シリア属州

パルミラ出身の有力者であったセプティミウス・オデナトウスと協力してササン朝を打ち破った。この功績により、オデナトウスはガリエヌス帝から帝国東方属州の防衛を一任される存在となったため、オデナトウスを支配者とし、パルミラを首都とする実質的な地方政権が成立した。なお、オデナトウスはあくまでローマ帝国から独立せず、ガリエヌス帝に忠誠を尽くして戦った。しかし、267年にオデナトウスが暗殺されたのちに実権を掌握したゼノビア(アラビア系の部族出身でオデナトウスの妻)は息子のウァバトラトウスを「アウグストゥス」と名乗らせ、ローマ帝国からの独立を宣言し、自らは「女王」として実権を握った。パルミラ王国は現地住民やアラブ系遊牧民の支持を受け、ササン朝とも良好な関係を保ちつつも、ローマ帝国に対して明確な敵対姿勢を見せなかった(ガリエヌス帝も多正面作戦を嫌ってパルミラとの全面的な衝突を避けた)。一方でパルミラ王国はゼノビアのもとでエジプトや小アジア一带をローマ帝国から奪うなど領土を拡大した。しかし、273年にアウレリアヌス帝はアンティオキアを攻略するなどパルミラ王国に対する軍事作戦を強化し、パルミラもペルシア式の重装騎兵戦術で対抗したが敗れ、パルミラを攻め落とされたため、パルミラ王国は滅亡した。ウァバトラトウスは敗死し、ゼノビアは捕虜になったが、処刑はされずに解放されて、のちに元老院議員と再婚したといわれている。

*3 アウレリアヌス帝(ルキウス・ドミティウス・アウレリアヌス)はパンノニア属州のシルミウムで 214 年に生まれた。アウレリアヌスはローマ軍に入隊し、百人隊長や大隊長を務めたのちにガリエヌス帝のもとで騎兵隊司令官に任命され、268-269 年の対ゴート族戦争で数万人のゴート族を殲滅するなど有能な軍人としての才能を発揮した。270 年に内戦を制してローマ皇帝位に就いたのちも精力的な軍事行動を行い、271 年にアレマンニ族・ゴート族を破り、273 年にはパルミラ王国を征服した。274 年には 15 年近くにわたって帝国西方を占領していたガリア帝国を接収(ガリア皇帝テトリクス 1 世が自身の身の安全と引き換えに降伏)し、ローマ帝国の再統一を成し遂げた。この功績により、元老院から **Restitutor Orbis**(世界の修復者)の称号を贈られた。アウレリアヌスの成し遂げた主な業績は他にはダキア属州(トラヤヌス帝により 106 年に属州化)のゴート族への譲渡とゴート族との講和やローマ市の城壁再建、貨幣の改善などが挙げられる。アウレリアヌスの努力にもかかわらず、帝国の衰退と混乱は収まることはなく、275 年にアウレリアヌスが暗殺されると帝国は再び大きな混乱期を迎えることとなる。

(4)帝国側の対応

- ・騎兵隊中心の大規模な野戦機動軍の創設
国境線駐屯軍のみではゲルマン人・ササン朝ペルシアの侵入を抑えることが困難
→皇帝直属の中央野戦軍により紛争地に急行・鎮圧することが可能になる
- ・軍事指揮官職からの元老院議員の排除
→元老院議員の軍事指揮官職就任を禁止(ガリエヌス帝時代からだと言われる)
→軍人と政治家の完全分離を達成、軍団の統率力向上

⇒これらの改革により軍事的危機を打開。しかし、かつてのローマ帝国のあり方とは大きく変容してしまうこととなり、後期帝政への流れが加速してゆく。

[ディオクレティアヌスの改革 ―後期帝政の開始―]

・テトラルキア(四分統治)

広大な帝国を一人の皇帝が防衛・統治するのは不可能

→数人の皇帝で分割統治を行う

(1)ディアルキア(二分統治)→東西 2 名の皇帝(285-293)

ディオクレティアヌス…東方皇帝(Augustus Iovius)

マクシムス…西方皇帝(Augustus Hercules)

→二分統治でも効率的な統治が困難

(2)テトラルキア(四分統治)→東西皇帝(Augustus)のもとに副帝(Caesar)を置く(293-305)

東方正帝ディオクレティアヌス

担当地域：小アジア・シリア・パレスティナ・エジプト・リビア・メソポタミア

首都：ニコメディア

東方副帝ガレリウス

担当地域：バルカン半島～ドナウ川右岸

首都：シルミウム

西方正帝マクシムス

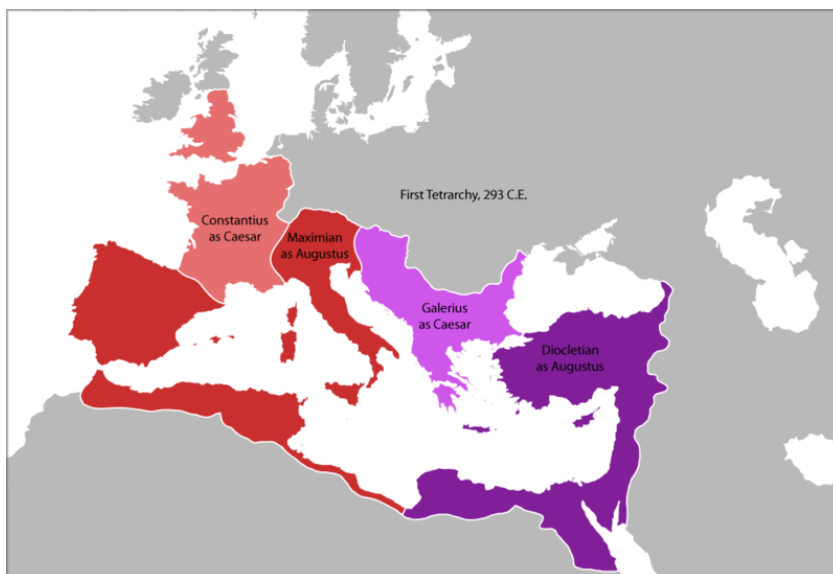
担当地域：イタリア・リビア・キレナイカ・マウレタニア・ヒスパニア

首都：メディオラーヌム(ローマでないことに注意)

西方副帝コンスタンティウス・クロルス

担当地域：ブリタニア・ガリア・ゲルマニア

首都：アウグスタ・トレヴェローヌム



・皇帝権威の拡大

(前期帝政期)

皇帝はあくまで **S.P.Q.R** の「プリンケプス(第一人者)」であり、皇帝個人の人格に重点が置かれる

(後期帝政期)

皇帝の称号としての **Dominus**(主)の使用

貨幣などに描かれる **皇帝像の差別化**が縮小(個人よりも皇帝という地位への崇拝)

ディアデマ(冠)の使用や儀礼の差異化

→**東方的な絶対的君主像がモデル**



↑テオドシウス 1 世が描かれた硬貨。

頭にはディアデマが巻かれている

[ディオクレティアヌス改革の影響]

(1)共同統治帝の出現に伴う宮廷の増加と軍団の拡充

東西それぞれの正帝副帝 4 名の皇帝が並立したため、各皇帝の支配地にそれぞれ宮廷・軍団が置かれる

→**巨大な官僚・軍事機構の誕生・拡大**

→**帝国政府関連の役職が増加・地方都市の有力者が帝国政界に進出**

→**帝国中央と地方都市の接触が密接になる**

(cf.アントニヌス勅令(212 年)による全属州民へのローマ市民権付与も一因)

(2)属州の分割・細分化

従来のイタリア本国ー属州の制度を廃止・新たに道・管区・属州の 3 行政区を設立

→**道(Praefectura Praetorio) > 管区(Dioecesis) > 属州(Provincia)の順で階層化**

→イタリア道・イリュリクム道・ガリア道・オリエンス道の 4 道に分かれて統治。皇帝 1 名に対して 1 つの道を統治。

→4 道のもとに 15 管区が属し、その下にさらに約 100 の属州が属する(4 世紀中葉)

→**属州の細分化により総督の権限を削減・中央集権化を進める**

cf.ヴェローナ・リスト

→ヴェローナで発見された 4 世紀初頭のローマ帝国各属州のリスト。約 100 州が記録される

第九回(6/23)

テーマ:ローマ帝政後期の都市

※今回は前期帝政との対比がかなり重要な部分を占めており、この授業自体のメインテーマの一つでもあるので、適宜第二～四回の授業まとめを参照して下さい。

[アントニヌス勅令]

〔インペラトル・カエサル・マ〕ルクス・アウレリ〔ウス・セウェルス・〕アントニヌス・ア〔ウグストゥス〕が告示した。(中略) そこで、私は外人たちが我らの民(ローマ市民)の中に入るたびに彼らを神々への崇拜に導いたならば、私が偉大にして経験に神々の威光に相応しいことをなすことができると信じる。それゆえに世界中に住むすべての外人にローマ市民権を与える。降伏者(*1)を例外としてすべての種族が〔ローマ市民の地位に〕とどまる。(歴史学研究会編『世界史史料 1 古代のオリエントと地中海世界』より「アントニヌス勅令(P. Giss. I. 40 より)」)

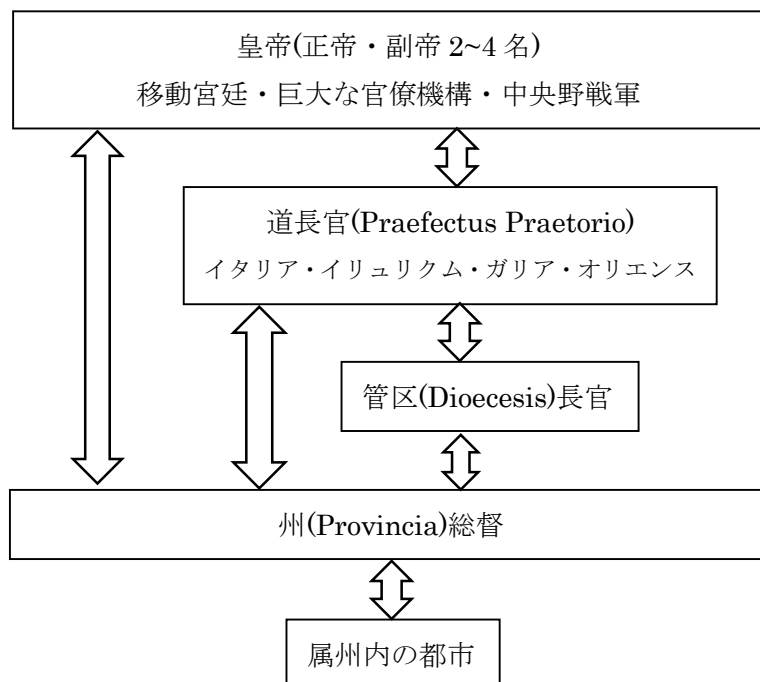
*1 ラテン語訳版(P. Giss はギリシア語)で *dediticiis* なので解放奴隷・奴隷のことだと思われる

・212年、カラカラ帝(マルクス・アウレリウス・セウェルス・アントニヌス)によって発布
→帝国内の全自由民にローマ市民権を付与

→東地中海世界(ギリシア語・ヘレニズム文化圏)でのローマ市民権保有者を増加させた
※ガリア・ヒスパニアなど(西地中海・ラテン文化圏)では元々ローマ市民権保有者が多い
⇒地中海世界の一体化・「ローマ市民」「非ローマ市民」の区別の消滅

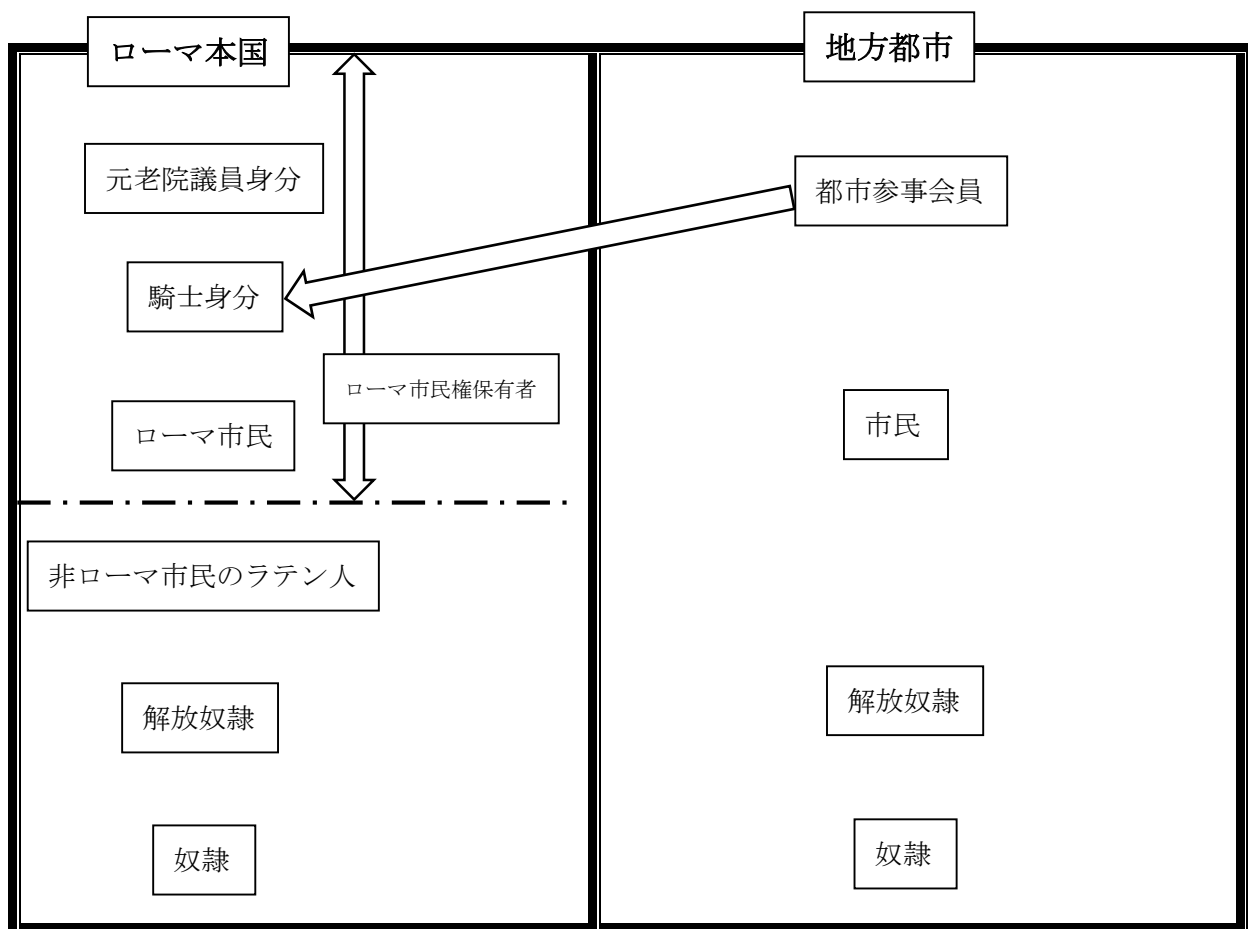
[後期帝政の地方行政]

※前期帝政の地方行政構造については第三・四回まとめを参照



- ・ディオクレティアヌス帝による道・管区の設置、州分割による行政の細分化
 - 属州内の都市代表と皇帝の直接交渉が困難に(cf. 前期帝政期には直接交渉が可能)
 - 道－管区－州という行政ヒエラルキーを通した皇帝からの命令系統の確立
 - 都市住民の意思を反映・伝達する役割が都市参事会から州総督へと移る(州分割による州総督の地位低下も一因)
 - 都市参事会の地位低下・アントニヌス勅令後に市民権を得た都市参事会員の中央政界進出の試み(次項で解説)

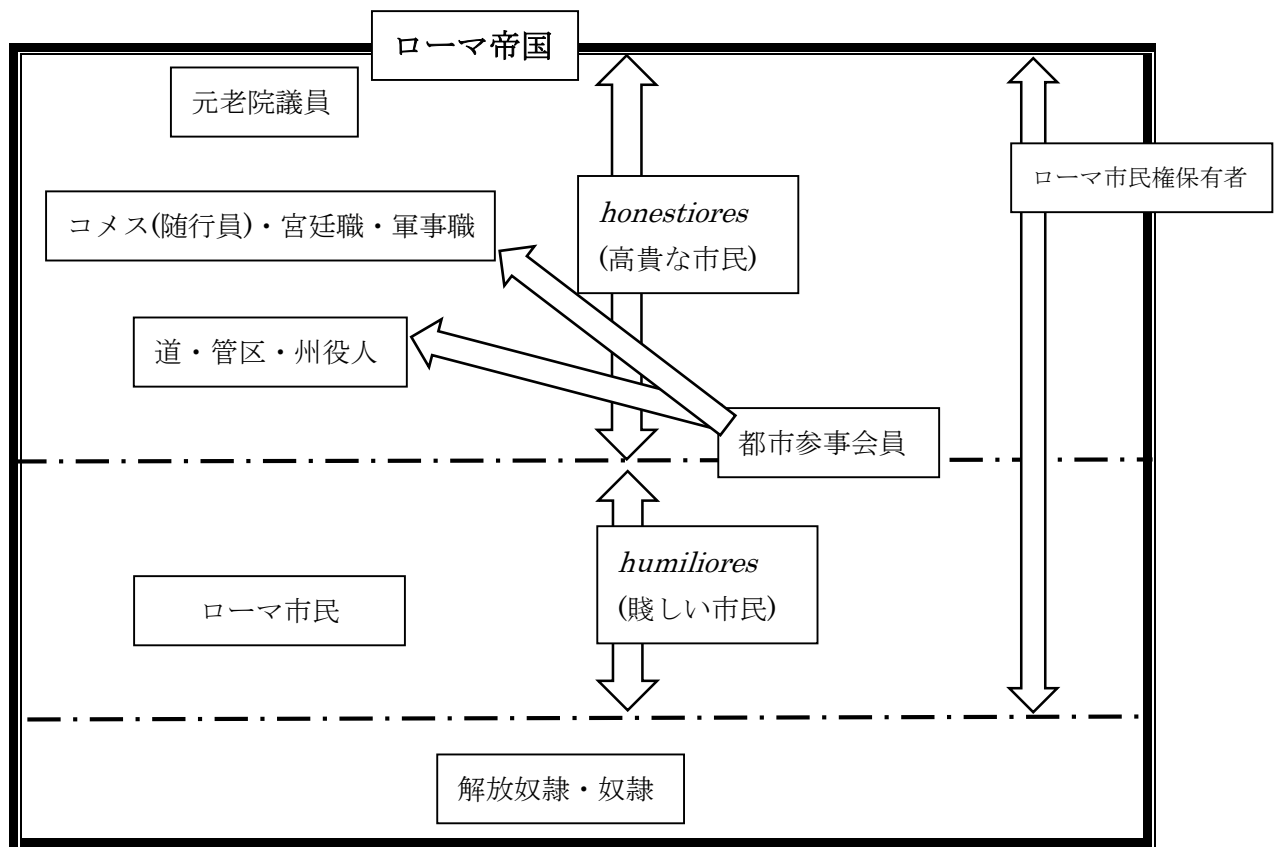
[前期帝政期の社会階層]



(前期帝政期の社会の特徴)

- ・ローマ本国と地方都市で類似の身分構造が併存
- ・地方都市の上層身分(都市参事会員)はローマ市民権・騎士身分をあわせ持つ
 - 元老院・ローマの中央政界への進出を目指す

[後期帝政の社会階層]



(後期帝政期の社会の特徴)

- ・複数の皇帝・宮廷の登場および地方行政機構の細分化による**官僚組織の拡大**
 - ・**アントニヌス勅令によるローマ市民権の普及**
 - ・地方行政のヒエラルキー化・中央集権化による**都市参事会の地位低下**
- ⇒**地方出身者の帝国政界進出のチャンスが増大・地位や官職の流動性が高まる**
- ・**身分や地位のインフレーション**

⇒元老院議員身分と騎士身分の融合

(cf. コンスタンティノポリスへの元老院の増設・元老院の定員拡大)

(後期帝政期の社会変動のもたらした影響)

- ・都市参事会の地位低下と地位や官職の流動化
 - 地方の都市参事会員が教会や軍団、元老院に大挙して進出・都市参事会員の枯渇**
 - 皇帝が地方の都市参事会を維持するために法令で身分・官職の移動を制限
(cf. 『テオドシウス法典』)
 - 後世の評価としては「身分の固定化」「強制国家」と捉えられるが、実際には身分・官職の無秩序な流動を政府側が統制・秩序化しようとした取り組みである**

[都市自治の変質]

(基本的な概念)

⇒「都市の自治」への皇帝・州総督の介入

→第2～5回の授業を参照し、前期帝政との比較という視点で眺めてみるべき

(背景)

ディオクレティアヌス帝の改革以降、皇帝中心の中央集権化・行政のヒエラルキー化が進行

→「都市」は「州(**Provincia**)」の構成組織でしかなくなり、前期帝政期には行ってきた皇帝・元老院との直接交渉が封じられる

(後期帝政期の地方都市)

・州総督による財政の掌握

→公共建築・競技会開催、公式行事の開催と運営を総督が行う

(背景としては軍人皇帝時代以降の地方での混乱・インフラの機能不全を回復させる目的)

→これらは前期帝政期にエヴェルジェティズム(第3・4回授業を参照)のもとで「恵与者」によって、私財で行われていたものであった

・都市間競争の終焉

→「都市」の帝国内における存在感の低下と同時に、前期帝政期では盛んであった都市間の「格」をめぐる競争が終息へと向かった

→代わって州単位でのアイデンティティ形成が行われる

(結果・影響)

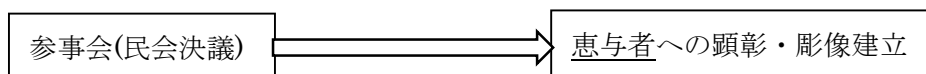
・都市参事会の地位低下

→州総督の都市政治への介入・皇帝や元老院への直接交渉が不可能になったことによる

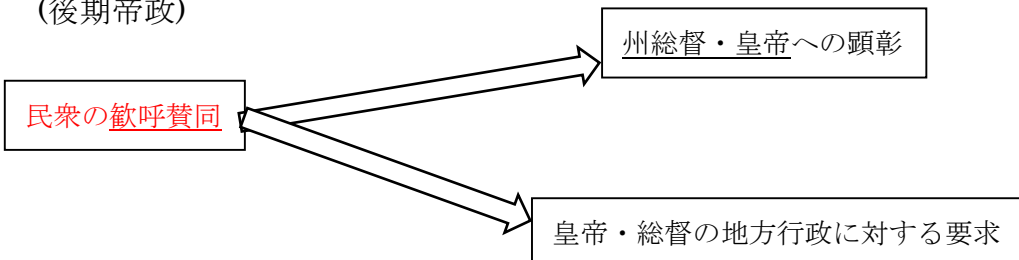
→都市参事会員の帝国中央への進出志向

・伝統的な名誉授与の衰退

(前期帝政)→後期帝政期には衰退



(後期帝政)



- ・「ローマ市民」「非ローマ市民」の区別の消滅

- アントニヌス勅令でローマ帝国内の全自由民にローマ市民権を授与

- 前期帝政期には一般的だった「ローマ市民権」の有無による区別が不可能に
(「ローマ市民」という特権階級の実質的な消滅)

- ”honestiores(高貴な市民)”,”humiliores(賤しい市民)”といった曖昧な区別

- ・民衆を動員する新たな組織

- (1)都市参事会に代わって「民衆の歓呼」が都市市民の政治的主張の方法として台頭

- (2)都市参事会員の中央への流出

- カリスマ的指導者・扇動者による民衆の動員による政治活動がさかんに

- ex.)戦車競技団(*1)・劇場の喝采団・ソフィスト・司教・哲学者・修道士 etc...

*1 戦車競技(チャリオットレース)は前期・後期を問わず、帝政期のローマ市民を非常に熱狂させたスポーツである。戦車競技は多くの場合、皇帝や総督によって実施されることが多かったため、戦車競技の場で市民が皇帝や総督に「歓呼」の形で意見を表明することが多かった。また、戦車競技の応援団は熱狂する市民を扇動しやすい立場にあったことも事実である。532年には東ローマ帝国皇帝ユスティニアヌス 1 世の政策や重税に反対する市民が戦車競技の場で熱狂のうちに皇帝に対する暴動を起こし、反皇帝派の元老院議員と結託して反乱にまで発展した。反乱は間もなく皇帝が軍を動員して暴徒化した市民を武力で鎮圧し、反乱に加わった元老院議員を逮捕して追放したために沈静化した。この反乱により、多くの元老院議員が粛清されたために東ローマ帝国において元老院が有名無実化した。以後、東ローマ帝国は中央集権化・専制君主化の道を進むこととなるのである。

第十回(6/30)

テーマ:キリスト教の「国教化」

[キリスト教会の都市行政への関与]

- ・ローマ法関連の法的行為
 - 奴隷解放・後見人の設定・遺贈の授与など
- ・上訴審としての司教法廷
 - 州総督によって行われる一次的な裁判結果を受容しない者による司教裁判への上訴
 - ⇒従来は神殿が果たしていた裁判・市場などの市民生活の「基盤」としての役割を「教会」が果たすようになる(4世紀以降)

[コンスタンティヌス帝(位 306-337)の宗教施策]

- ・宗教的寛容策とキリスト教会への積極的財政支援(聖職者特権・建築資材提供・穀物給付)
 - 聖職者への免除(税などの市民負担)特権
 - 教会内でのローマ市民法上の法的行為を公式に承認
- 4世紀初頭時点におけるキリスト教会自体は地域・教義の相違によって多くの分派が存在。(ex. モンタノス派(*1)・ドナートゥス派(*2)など)
- 支援を受けるべき「正統な」教会を確定する必要性が生じる
- ・教会会議(*3)開催の支援・普遍的教会規則の制定を目指す
 - 325年第1ニカイア公会議(*3)など

*1 モンタノス派は「歴史Ⅰ第六・七回まとめ」を参照のこと。

*2 北アフリカで誕生した分派。基本的教義はアタナシウス派など「主流派教会」と変わらない一方、棄教者・背教者の教会復帰を認めず、再洗礼を教会復帰の条件とする。311年にカルタゴ司教に任じられたカエキリヌスがディオクレティアヌス帝による大迫害の際に棄教した司教に洗礼を受けた経歴を持っていたことに反発した北アフリカの信者がカエキリヌスの司教位を認めなかったことに始まる。ドナートゥス派はディオクレティアヌス帝による迫害と棄教・背教の多発を時代背景とする。313年の第1ラテラノ教会会議でコンスタンティヌス帝および教皇ミルティアデスはドナートゥス派と「正統」教会の和解を図ったが、ドナートゥス派が和解を拒絶したため、結果的に異端(Schisma, 日本語では離教者であり、異端とは意味合いは違うが実質的な異端)認定された。

*3 教会会議(Synod/Council)と公会議(Ecumenical Council)の違いについて述べる。まず、教会会議は東方正教・カトリックともに一定の地方を代表する司教が集合して教義や教会の運営などに関して会議を行うものである。公会議は東西教会で呼称の統一や定義に違いが生じるために説明が難しい。公会議の本来の定義は「全世界」の司教が集まる会議という意味である。この意味を狭義にとった場合に公会議と定義できるのは第7回公会議(第2ニカイア公会議)までである。第7回公会議までは東西両教会がともに認可しているという意味で「全世界的」なものといえる(アッシリア東方教会、エチオピア正教

- ・キリスト教信仰を打ち出すことで都市への昇格を勝ち取る自治体の出現
→「偽予言者アレクサンドロス」の創始した新興宗教によって都市の地位向上を勝ち取ったアポーノテイコス(歴史Ⅰ 第五回まとめ参照)や、エフェソス崇拝が都市としての特徴・誇りとなっていたエフェソス(歴史Ⅰ 第二回まとめ参照)のように、**帝政前期を中心に「独自の宗教」を押し出すことでアイデンティティを獲得していた都市が「キリスト教」へと乗り換えていく現象が発生**

→前期帝政～第二次ソフィスト運動期に流行したギリシア・ヘレニズム文化の影響で「ギリシア古典」「ギリシア哲学」(ex. ヘロドトス、プラトンの著作)が人々の行動の指針となっていた

⇒「聖書」の普及により、「聖書」に登場するエルサレムを中心とするパレスティナ地方への関心が高まる

→このころから「聖遺物」「聖人」への崇敬(*4)も一般的になり始める

- ・ローマ帝国での「キリスト教公認」の対外的影響

***5** アクスム王国は現在のエリトリア・エチオピアを中心として成立した王国である。アクスム王国の正確な成立年代はわかっていないが、シバの女王(紀元前1000年ごろの伝説的なエチオピアの女王)とイスラエルのソロモン王の子であるメネリク1世の末裔であると主張している。アクスム王国は1世紀ごろからローマ・インド(クシャーナ朝・アーンドラ朝)間の季節風を用いた中継貿易で発展した。325年頃にコプト派キリスト教が伝来し、直後に「国教化」された。これが



後に 3600 万人の信徒を持つことになるエチオピア正教の「発祥」であった。こうしたキリスト教化の背景には貿易相手国のローマとの関係を重視しようとしたことが挙げられる。

[テオドシウス帝によるキリスト教「国教化」]

→単一の明確な法令によるものではなく、380 年・392 年と 2 つの段階を経て「国教化」

・380 年の勅令(Cunctos Populus/テッサロニカ勅令)

皇帝グラティアヌス、ウァレンティニアヌス、テオドシウスがコンスタンティノポリス市民に。

我々の寛容で穏健なる治政下にあるすべての人々(原文 Cunctos populus)が、敬虔なる伝統によって守られてきた、聖なる使徒ペテロがローマ人に伝えた宗教、つまり大司教ダマス(訳者注:ローマ教皇ダマス 1 世(*1))および使徒の如き聖性を持つ者、アレクサンドリア司教ペトルスが信仰する宗教を信仰することが我々の希望である。使徒の教えや福音の教理に基づき、唯一の神たる「父」、そして「子」と「聖霊」を等しい偉大さを持つ者として、また至聖なる三位一体の存在として信仰(A)しようではないか。我々はこれに従う者が「普遍的(原文 catholicorum/英訳 catholic)」(B)なキリスト教徒と名乗ることを許可しよう。しかし、我々はその他の者に関しては愚かな狂人であると判断するため、彼らは恥ずべき異端という烙印を押されるべきであり、大胆にも教会の名のもとに礼拝を行うことをしてはならないことを布告する。彼ら(異端)は第一には神聖な非難という罰に、第二には我々が神の意志に基づいて我々の権威のもとに加えるであろう罰に苦しむことだろう。

皇帝グラティアヌスが 5 回目にして、皇帝テオドシウスが執政官の年の 3 月 3 日にテッサロニカにて発布する。(訳者 Rvsungari、原文 Codex Theodosianus、英訳版からの重訳。原文・英訳ともに https://en.wikipedia.org/wiki/Edict_of_Thessalonica より)

- *1 第 37 代ローマ教皇(位 366-384)。ルシタニア属州(現:ポルトガル)出身。ニカイア派支持者であり、アリウス派からの激しい攻撃を受けながら、366 年にローマ教皇に着座する。ローマ教皇着座後は 368 年と 369 年の教会会議でアポリナリオス主義(*2)やマケドニウス派(*3)といった反三位一体派を批判した。380 年にはテオドシウス帝によるテッサロニカ勅令発布に協力する一方で、ヒエロニムス(ウルガータ聖書の編纂者)を登用した。
- *2 ラオディケアのアポリナリオス(?-390)によって提唱された説。三位一体説を支持する一方でイエスの精神に「人間的理性」は存在せず、「神の理性」のみしか存在しないことを提唱した。ここで特記すべきなのは、アポリナリオスは反アリウス派であり、イエスの人間性を重視するアリウス派にちする極端な批判がイエスの人間性を大きく否定する教説を生んだとする考え方もできる。381 年の第 1 コンスタンティノポリス公会議で異端とされた。
- *3 マケドニウス(4 世紀中葉頃)によって提唱された説。半アリウス派とも呼ばれる。その説は大きく二つに大別され、一つは「神」と「イエス」が「ホモイウシオス」(類似した性質である)としている点で、これは「神」と「イエス」が「アノモイオス/ヘテロウシオス」(相違である)または「ホモイオス」(似ている)とするアリウス派とは微妙に異なり、ニカイア派寄りである。もう一つには「聖霊」の神性を否定することで、三位一体を根本的に否定している点が挙げられる。この点から、マケドニウス派は「 Pneumatomachi(Pneumatomachi、霊魂と闘う者)」とも呼ばれる。

・テッサロニカ勅令の意義

→「正統」(カトリック)教会の確定(初めて「カトリック」の語が用いられる、下線部(B))

→「正統」…ニカイア派(*4)

「異端」…非ニカイア派(アリウス派(*5)など)

→「正統」教会に対しては皇帝からの援助が与えられ、「異端」は排斥される

*4 ニカイア派とは 325 年の第 1 ニカイア公会議の結果を受容し、ニカイア信条(*7)を受け入れる宗派を指す。主にアタナシウス派(*6)を中心とする。

*5 アレクサンドリア司教アレイオス(c.250-c.336)の教説を信奉する一派。ユダヤ教的な神の唯一性を唱え、イエスの神性を否定的にとらえ、「イエス」は「神」の被造物にして「養子」だと考え、「神」と「イエス」がヘテロウシオス(相違する)とする。325 年に第 1 ニカイア公会議でアタナシウス派に敗北して異端認定されるも、かなりの支持を集めていた。『教会史』の作者であるエウセビオスやコンスタンティヌス帝もアリウス派キリスト教徒であったとされる。

*6 アレクサンドリアのアタナシウス(298-373)の教説を信奉する一派。基本的な考え方は「三位一体」であり、「神」と「イエス」はホモウシオス(同質)と考える。「アタナシウス派」という呼称については一般的ではなく、一般的には「ニカイア派」の呼称を用いることが多い。その理由は、まず「三位一体説」を唱えたアタナシウスが第 1 ニカイア公会議に出席した際はまだ 27 歳の輔祭であり司教・大司教なみの影響力はなかったこと、第 1 ニカイア公会議自体の結論は「アリウスの追放・アリウス派の異端認定」であったが、三位一体説は未確立であったこと、第 1 ニカイア公会議後のアタナシウスはアリウス派よりの皇帝のもとで 5 回の追放を受けていること、三位一体説が一つの教説として明確に確定するのは 381 年の第 1 コンスタンティノーブル公会議(アタナシウスの死後)であることを考えれば、「三位一体説」の一切をアタナシウスに帰するのは困難であるからである。

*7 「信条(正教会では信経)」はキリスト教の教理を示した文章である。使徒信条やニカイア信条、カルケドン信条などが知られる。ニカイア信条(正教会では原ニケア信条)は 325 年の第 1 ニカイア公会議の際に制定され、三位一体説・神とイエスの「同質」性などが盛り込まれている。この内容は多くの地方で受け入れられたが、内容に不備があるなどの理由で改変の要求が出ていた。これに対し、テオドシウス帝はテッサロニカ勅令を出した直後に第 1 コンスタンティノポリス公会議(381 年)を開催し、アリウス派を排斥し、ニカイア派を「正統」とする決定を下す一方で、ニカイア信条の改正を行い「ニカイア・コンスタンティノポリス信条(正教会ではニケア信条)」を制定した。他にはアポリナリオス主義、サベリウス主義などの「非三位一体」派が異端とされた。

・392 年の勅法(俗に言う「キリスト教国教化」)

→偶像崇拜・供犠行為・肝臓占い・従来の神殿の利用の禁止(=異教(ユダヤ教以外の神)への崇拜儀式的禁止)

Ex. 393 年に古代オリンピックを「異教の神への儀式」として禁止

→「多神教」自体の禁止(ローマ・ギリシアの神の存在の否定)とは限らない

⇒テオドシウス帝の「キリスト教国教化」のロジックは、①「正統キリスト教」の確定と②「異教(ローマ・ギリシアの神への「崇拜行為」)」の禁止という 2 段階からなる

第十一回(7/7)

テーマ:教会の組織化と田園部の発達(前半)

[人々の心性と宗教実践のあり方]

⇒「キリスト教」は何か? 「異教」とはどこが異なるのか?

- ・フリュギアのゾシモス

『霊の書物(聖書)』と『ホメロスの詩句』を用いて予言

→ゾシモスはキリスト教徒と言えるのか? 異教徒なのか?

Cf. 第十回授業にて「参照される古典」としての『聖書』が言及されている

→一般市民のレベルでは『聖書』は「ひとつの古典」としての認識しかないのではないか

- ・公現祭のあり方とクリスマス祭儀

Cf. サラミスのエピファニオス『薬籠』より

「偶像崇拜を創始した詐欺師たちはこの真実の一端を認めざるを得ず、彼らを信じる偶像崇拜者を騙す為に公現祭(*1)と同じ夜に最大の祭りを催して (中略) この日この時間にコレー(すなわち処女)がアイオーンを生んだと答えている」

*1 公現祭はイエスの生誕と洗礼、東方三博士による訪問というイエスの生誕に関わる様々な出来事に對する祝祭であり、現代では1月6日とされる。(クリスマスはイエスの生誕のみ)

(問題点)

①エピファニオスは「コレーがアイオーンを生んだ日」を祝うアレクサンドリアの人々を「偶像崇拜」として批判していた

→この祭儀が(1)イエスの誕生日と同日であること(2)コレー(処女)=聖母マリア、アイオーン(*2)=イエス・キリストに比定可能であること

(1)(2)を考えれば、アレクサンドリアでの「祭儀」は真に「異教」と言えるのか?

*2 アイオーンはギリシア語で「時空間」を指す語であるが、宗教的文脈(主にグノーシス主義)では「超越的な魂」「高次の霊」を指す。なお、アレクサンドリアのあるエジプトはシリアと並ぶ西方グノーシス主義の中心の1つであった。

②12月25日(クリスマス)、1月6日(公現祭)という日付

→(1)イエスの誕生に関する聖書の記述は不十分

(2)4世紀後半になるまで帝国西方で公現祭が祝われた記述はない

→初出はアンミアヌス・マルケリヌス(ユリアヌス帝期の軍人・作家)による361年の記述

(3)12月末～1月初旬にはローマ・ギリシアの神々の祭儀が集中

→12月17～23日にはサトゥルナーリア(サトゥルヌス神祭)が開かれ、豊作祝いの宴会が行われる

→ここから推論できるのは、ローマ・ギリシア世界の神々への祭儀が「クリスマス」「公現祭」のような後発のキリスト教祭儀に影響を与えたのではないかと推測される。

・エフェソスのアルテミス神殿での英雄祭祀

Cf. ペルシオンのイシドロス (?-c.450) 『書簡集』

「殉教者たちの遺体の灰が、彼らの神に対する愛と志操の堅固さゆえに、我々から崇敬されている (中略) 邪な悪行で名を馳せた者たちの遺骸は嫌悪するようにしなさい。というのも、異教徒(ヘレネス=ギリシア人)たちはそれをアルテミス=エフェシアの神殿に埋めて、極めて浅ましい形でそれを崇拜の対象とし…」

→ギリシア世界には古くから「英雄(神と人間の子)」の墓所を神聖視する風潮があり、これは聖人・殉教者の遺骸を「聖遺物」として崇敬するキリスト教思想に影響を与えたのではないか。(「神」を絶対視するキリスト教では「人間」でしかないはずの聖人の奇跡や、「物」でしかない聖人の遺骸を崇敬するという「聖人崇拜」は異質)

・アンティオキアにおけるシナゴグの権威

→コンスタンティノポリス司教ヨハネス・クリュソストモス(c.347-407)による説教(キリスト教徒がユダヤ教のシナゴグに出入りすることを非難)

「もし何人かがあなたの息子を殺すなら、あなたは…その殺害者の挨拶をまともに受けることができようか。子を十字架にかけた悪魔そのものである殺害者から、身を遠ざけないでいられようか。…そうした殺害者たちが祈っているところこそシナゴグであり…、腐敗と悪徳の深淵である。…多くの人々がユダヤ人を尊敬し、彼らの生活に敬意を抱いていることを私は知っている。こうしたとんでもない信徒たちの考え方を根本から絶やすことを、私は自分の急務としているのです。」(388年にヨハネスがアンティオキアで行った説教)

→4世紀末に至ってなお、民衆のレベルでは「キリスト教」「ユダヤ教」の区別が曖昧

(結論)

国家・教会レベルではキリスト教「国教化」・「異教」の禁止・教義の統一を志向

↓

一般信徒のレベルでは「キリスト教」と「その他」の区別が曖昧

国家・教会による統制には限界が見える

[公会議と異端の認定]

→「流動的」キリスト教の固定化・地方教会同士の合従連衡・パワーゲーム

・エフェソス公会議(431)

→「テオトコス Θεοτόκος」論争(*1)を通じたコンスタンティノポリス司教ネストリウスとアレクサンドリア司教キュリオスの論争

→ネストリウス派の敗北・異端認定とネストリウスの追放

→ネストリウス派は東ローマ帝国内での活動が困難になり、東方(ペルシア・シリア)に逃亡

→ペルシア商人やソグド人に対する布教が行われ、交易路(シルクロード)を通じて中国に伝播(cf. 大秦景教(中国でのネストリウス派の呼称)流行中国碑(781年))

- *1 「テオトコス」とは「神を産むもの」を意味し、聖母マリアはイエスの神としてのヒュポスタシス(位格)を産んだ存在とみなす呼称である(神の本性を産んだ存在ではない)。これに対して 429 年頃、コンスタンティノポリス司教のネストリウスは「テオトコス」の呼称はアポリナリオス主義(第十回まとめを参照)的であり、聖母マリアは「クリストコス(キリストを産むもの)」と呼ばれるべきだとした。

※その後のネストリウス派とシリア語文献

ネストリウス派は東ローマ帝国での布教が禁じられたのちに、アッシリア地方(シリア・イラク北部)で信仰を保持し、エデッサ学派やニシビス学派を形成して教勢を維持したが、489 年に東ローマ皇帝ゼノンによる圧力をうけてアッシリアを追われ、当時東ローマ帝国と敵対していたササン朝ペルシアの庇護を受け、首都クテシフォンに新たな教会を設立した。

644 年にイスラム教勢力によってササン朝ペルシアが滅ぼされるとネストリウス派は保護を失い、一部はイスラム化の進んでいない中央アジアの遊牧民や中国での布教を行った。また一部はインドの「トマス派教会(使徒トマスを創始者と主張する教会)」と合流した。中央アジア・中国方面での布教は 8 世紀ごろに最盛期を迎え、特に唐代の中国では皇帝の保護を受けて発展したが、18 代皇帝の武宗による仏教弾圧(845 年頃)のあおりを受けて中国では衰退した。しかし、北方のモンゴル系遊牧民にはネストリウス派信仰を保持するものが依然として多く、元代にその存在が確認されるものの、元の滅亡以降は完全に信仰が途絶えた。



中東に残留したネストリウス派教会はアッシリア東方教会として命脈を保ち続け、第一次世界大戦中のオスマン帝国による大虐殺などの苦難を乗り越え、現在もシリア・イラクを中心に 40~50 万人の信徒がいるとされている。

アッシリアを中心に活動したネストリウス派はペシタ訳聖書をはじめとするシリア語文献を多く使用し、従来のギリシア語・ラテン語文献のシリア語訳作業も行った。こうしたノウハウの蓄積はアッバース朝時代にギリシア語文献の同じセム系言語であるアラビア語への翻訳が行われた際に役立ったとされている。

・カルケドン公会議(451)

→「単性論(*2)」の弾劾

- *2 単性論はエウテュケス主義と合性論の二つに大別される。エウテュケス主義はイエスの「人性」は「神性」に吸収されているとしていた。合性論では、イエスは単独の「本性」を持つ一方で「本性」のもとに「神性」「人性」が統合されており、「本性」の中に「神性」「人性」が併存するとした。現在のいわゆる非カルケドン派教会のほとんどは合性論を支持している。また、合性論はアポリナリオス主義的なエウテュケス主義への批判として形成された教説であるため、非カルケドン派教会は自身が「単性論」でないと主張している。非カルケドン派教会はシリア教会・コプト教会・エチオピア教会などが知られ、カトリック・プロテスタント・東方正教に次ぐ規模を誇る。

(カルケドン公会議の背景)

- ・各地の教会(コンスタンティノポリス・ローマ・アンティオキア・アレクサンドリア)間のパワーゲーム・主導権争い

→特にアンティオキア・アレクサンドリアの両教会は「学派」を形成して帝国東方の主導権を争っていた

→エフェソス公会議もネストリウス(アンティオキア学派)とアレクサンドリアのキュリロス(アレクサンドリア学派)の抗争であり、ローマ教皇の支持を受けたアレクサンドリア学派の勝利という見方が可能

→433年に両学派間で一応の和解を見るが、双方の強硬派は和解に満足しない

→ローマ教皇レオ1世・アンティオキア学派の支持するコンスタンティノポリス教会会議(448年)でエウテュケス(アレクサンドリア学派強硬派)が前述の「単性論」により「アポリナリオス主義者」として破門宣告

→アレクサンドリア司教ディオスコロス(アレクサンドリア学派強硬派)はエウテュケスの破門を拒否。

449年8月に東ローマ皇帝テオドシウス2世の承認のもと、エフェソスで「公会議」を開催、「単性論」を正統として承認・エウテュケスの破門取り消し・フラウィアヌスらローマ・アンティオキアの有力聖職者の破門を決定(出席したフラウィアヌスは暗殺された)

→ローマ教皇はこの「公会議」を承認せず、「エフェソス強盗会議(Latrocinium)」と批判し、教会分裂の危機が訪れる

→450年、アレクサンドリア学派・単性論に好意的なテオドシウス2世が急死、両性論を支持するマルキアヌス帝が即位、ローマ教皇の意向を受けカルケドンで公会議を開催

(結果)

- ・単性論(エウテュケス主義・合性論)の排斥・異端認定
- ・「エフェソス強盗会議」の効力取り消し・アレクサンドリア司教ディオスコロスの破門

→マルキアヌス帝の影響の強いプロテリウスが司教に任命され、「アレクサンドリア学派」の影響力が大きく削られる

→ディオスコロスの死(454年)の後、ディオスコロスを支持する者はカルケドン派教会を「ネストリウス主義」として批判し、「コプト教会」を設立して独立(二つの「アレクサンドリア教会」が並立)、こうした単性論者による独立教会設立がシリア・アルメニアでも発生

→「非カルケドン派教会」の始まり

- ・エルサレム教会のアンティオキアからの独立

→エルサレム教会のアンティオキア教会から独立が認められる(531年にユスティニアヌス帝によって総主教の称号が与えられる)

- ・カノン法(Canones)の制定

→都市定住型の司教・聖職者を基準とし、修道運動を管理

→キリスト教国教化時代において「教会」が帝国の都市支配の末端に組み込まれていく

第十二回(7/14)

テーマ:教会の組織化と田園部の発達(後半)

[修道士に対する崇敬の発達と宗教的熱情の高まり]

・修道士に対する崇敬

修道活動…(1)孤住型

神との一体感を求めて禁欲的な宗教修行を行うために単独で荒野や砂漠に隠棲した宗教家(隠修士)。アントニオス(c.251~356)によって確立。」

→前 5~4 世紀ごろにギリシアで発生した哲学者の一派である犬儒派(キュニコス派)にこうした禁欲的で一切の財産を放棄し、半ば乞食のような生活をしながら哲学的思索に耽るという、キリスト教修道活動の淵源が見られる。少なくとも地中海世界でこうした哲学のあり方は受け入れられていた。(マルクス・アウレリアヌス帝の『自省録』にもキュニコス派についての言及がある)

(2)集住型

多くの修道士が一ヶ所に集まって修道院を形成し、修道院での共同生活の中で修行を行う。パコミオス(c.292~348)によって確立。

→『偽予言者アレクサンドロス』にすでにアレクサンドロスが「若者を集めて教育した」との描写があることから、帝政前期にはこうした共同生活を通じた宗教活動の萌芽は見える。

(3)遍歴修道士

一ヶ所に定住することなく、街から街へ放浪を続けながら、修行や説法を行い、信者からの援助によって生活するもの。キリスト教の黎明期から存在する。

→定住しない、という活動の特性ゆえ教会・帝国の管理が行き届かない一方で多数の支持者を動員することが可能

→教会や帝国の地方行政に対する脅威であり、テオドシウス帝以降急速に規制が進む

・修道活動の広がり

当初はエジプト・パレスティナが中心であった修道活動が次第にシリア・小アジア・西地中海に拡大していく。その背景には柱頭行者シメオン(*1)などの有名な修道者の活躍やアレキサンドリアのアタナシオスによる『聖アントニオス伝』(*2)の流布、ヨハネネス・カッシアヌス(*3)の影響があった。

*1 柱頭行者または登塔者シメオン(c.390~459)は小アジア南部のキリキアに生まれ、若くして修道院での修道生活を送り、多くの奇跡を起こしたとされる(詳しくは配布史料を参照)。シメオンは 20 代後半から修道院に建てられた柱の上で 40 数年間修行を続けたとされる(右図)。



- *2 アレクサンドリアのアタナシオス(c.296~298-373)は 325 年の第 1 ニカイア公会議でアリウス派に対する反駁の急先鋒に立った人物で、ニカイア派(正統信仰)の確立者の一人である。彼はエジプトの隠修士であり、修道活動の創始者でもあったアントニオスとも親交があり、アントニオスの死去した直後の 357 年頃に『聖アントニオス伝』を記したとされる。『聖アントニオス伝』の内容はアントニオスの生涯と彼の功績をたたえたものである一方、理想的な修道士のあり方を示したものである。この中には隠修士アントニオスがエジプトで大きな影響力を持っていたことがうかがえる記述がある。

こうして、このように優れた人物〔アントニオス〕によってアレイオス(筆者注:アリウス)派の異端が排斥されていくのを聞いて、人は皆、喝采した。そして〔アレクサンドレイア(筆者注:アレクサンドリア)の〕町中の人々がアントニオスを目見ようと駆け集まってきた。それだけでなく、異教徒たちも、〔彼らのあいだで〕祭司と呼ばれている人々も、主の〔家すなわち教会〕に来て、「神の人にお会いしたい」と言って懇願した。このように、あらゆる人が彼〔アントニオス〕を呼び求めた。そして、この町〔アレクサンドレイア〕でも、彼を通じて主は、悪霊どもに心を悩まされている多くの人を浄め癒したのだった。このため、大勢の異教徒までもが、自分に益をもたらすと信じて、彼〔アントニオス〕に触れることを請い求めた。(アレクサンドレイアのアタナシオス『アントニオス伝』, 小高毅訳, 上智大学中世思想研究所編訳『中世思想原典集成 1』より)

- *3 ヨハンネス・カッシアヌス(c.360~435)はドナウ川河口近くのスキュティアに生まれた。ケルト人であったとも言われている。20 代前半の時、友人のゲルマヌスとともにパレスティナやエジプトに留学し、当時盛んであった集住型修道活動を知った。その後コンスタンティノポリスを経てローマへ向かったカッシアヌスはローマ教皇インノケンティウス 1 世の下、南ガリア(現在のマルセイユ付近)で修道活動を開始した。カッシアヌスは西地中海世界に修道活動を紹介したひとりであり、彼の思想は後のベネディクトゥスにも影響を与えた。

・修道院と田園部の発達

修道院はその成立過程から、中心市から離れた田園部に建設されることが多い

(→司教によって運営される教会は中心市に建設される)

→田園部の住民の支持を修道院が集める。また、田園部は中心市への食糧供給地であり、こうした食糧生産拠点を修道院が抑える

→田園部を強力な支持基盤とする、中心市における教会と並ぶ大きなキリスト教勢力

→教会と協力・敵対関係を維持しながらキリスト教信仰に大きな影響力を持つ独立勢力

→修道院の動員力を恐れた教会・帝国による規制

(東方では修道活動の草創期から規制活動が見られる。Ex. カエサリアのバシレイオス『修道制大規定』)

・殉教者崇拝や聖地巡礼の登場

殉教者の「聖遺物」(遺骨・生活用品など)に「奇蹟を起こす力」があるという信仰(その萌芽自体はヘレニズム時代のギリシアでの英雄崇拝に見られる)

→聖遺物への崇敬の政治利用(ex. コンスタンティヌス帝による聖墳墓教会建設)

→聖遺物が前期帝政期のエヴェルジェティズムに代わる新しい都市のステータスになる

→各都市での聖遺物獲得競争(一部には捏造も見られたとされる)

→同時に、「聖書」の普及やキリスト教「国教化」の影響で聖地エルサレムや殉教者ゆかりの土地への関心が増大し、帝国各地から巡礼者が聖遺物を目当てに聖地を訪れる。(その背景には地中海世界にくまなく広がる、ローマ帝国の建設した道路網や会場交通網の存在がある)

[教会の分立と並存]

- ・ローマ市民権の行使と正統信仰との結びつき

コンスタンティヌス帝以降、教会がローマ法の執行機関となっていき、テオドシウス帝による 380 年のテッサロニカ勅令での「正統キリスト教」の規定

→正統(ニカイア派)キリスト教徒でなければ、ローマ法の保護を受けられず、官職に就けない状態(正統キリスト教信仰自体がローマ市民権と結合する)

- ・各地方言語の発達

キリスト教拡大により、聖書をさまざまな地方の言語に翻訳して布教する必要性

→ゴート・アルメニア・グルジアでの文字の発明(いずれも、知識人階級の司祭による)

→後のキリル文字の原型となるグラゴール文字の発明者であるスラブの使徒キュリロス(827-869)・メトディオス兄弟(826-885)もスラブ人へのキリスト教布教のためにギリシア文字を参考に文字を発明したといわれる。

[まとめ；後期帝政の都市・宗教のあり方]

(1)宗教

「民間レベルでの拡大・変容を遂げようとする宗教」



「宗教を秩序化しコントロール下に置こうとする帝国・教会」

前期帝政期には、「偽予言者アレクサンドロス」の例にあるように、さまざまな目的があったにしろ、当時の神話を独自に解釈・変容させることは当然のように受け入れられていた。一方で、ほぼ同時期に拡大を始めたキリスト教でもそうした多様な教義解釈をなす動きは見られた。しかし、独自の多様な聖書・教義解釈をなすマルキオンやグノーシス主義諸派に対抗する「正典」による教義固定の動きは 2~3 世紀以降開始され、グノーシス主義は排斥され、後の「正統キリスト教」の原型が作られ始めた。

一方で後期帝政期にはコンスタンティヌス・テオドシウス両皇帝により、キリスト教(キリスト教会)が帝国の統治システムとして組み込まれ、特権を享受した。しかし、諸教派のうち「正統」で特権を享受すべき教会を確定するために公会議・教会会議を通じた国家を挙げた教義の固定・秩序化を行う動きが見られた。しかし、民間レベルでは「キリスト教」「異教」の区別はあくまで曖昧であり、修道活動などの新しい宗教活動も支持を集め、キリスト教は変容を遂げつつあった。このような帝国や「正統教会」のコントロールを離れた変容に対して帝国や「正統教会」は執拗に規制を試みていた。しかし、そうした勅法などによる「規制」の成功度・実効度はごくごく限定的であった。

(2)都市

前期帝政期における都市は属州内で高い地位を占めており、**皇帝と直接交渉をする権利やある程度の自治権が認められており**、都市参事会を通じた自治が行われた。また、都市間の地位競争も激しく、**エヴェルジェティズムに基づいたある種の公共建築の招致競争と名誉の授与競争も行われた**。このように**前期帝政期における都市は中心市を中心とした発展**が見られた。

後期帝政期にはディオクレティアヌス帝の行政改革により、**都市参事会の価値が低下し、属州の都市住民が中央政府に自らの意見を伝達する手段が都市参事会から州長官や皇帝に対する「歓呼賛同」の形に変貌した**。また、212年のアントニヌス勅令により全属州民が「ローマ市民」となった。そして、ディオクレティアヌス帝の導入した四分統治策は帝国内の官僚・軍事組織を肥大化させた。こうした時代の流れは**地方の都市参事会員の「参事会離れ」を加速させ、彼らに中央政界進出という目標を与えた**。また、都市参事会の代わりとなる「歓呼賛同」という帝国中央への自己主張の新形態の登場は民衆を多数動員可能なカリスマ的な存在(戦車競技の応援団・ソフィスト・司教・遍歴修道士)が地方政治に大きな影響力を及ぼし始めたことを意味する。

そして、「道―管区―州」という行政のヒエラルキー化は確かに属州の自立化を防いだが、**中央政府の権力が地方支配の末端組織へと変貌した「都市」の内部まで必ずしも届かない**、という皮肉な事態を生んだ。(例えば、アレクサンドリアなど一部の大都市ではテッサロニカ勅令やカルケドン公会議以後も異端の単性論派キリスト教信者が一定のコミュニティを築いていた)最後に、**中心市域でのエヴェルジェティズムの衰退と修道院や有力者のVilla(別荘)を中心とした田園部の発達**は従来の「**中心市に従属する田園部**」という都市像を変容させ、**都市の凝集性が緩和された**。こうした流れは、イスラーム化以前の中世前期の東地中海の一つの大きな流れである。

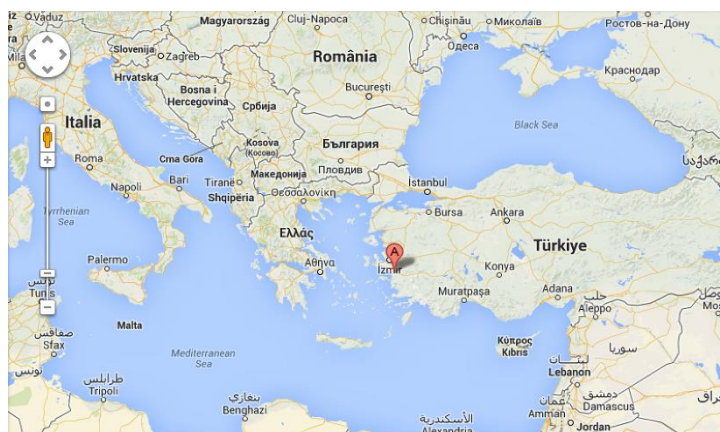
補遺

歴史Ⅰ 第二回史料について

[史料]ガイオス＝ウィビオス＝サルタリオスによるエフェソスのアルテミス祭祀

1. 前提

エフェソスについて



エフェソスはアナトリア半島西部に位置し、エーゲ海に面する都市である。この地域には、ミケーネ文明期から都市が築かれており、紀元前 8 世紀ごろからアルテミス崇拝の聖地として知られていた。紀元前 6 世紀以降、リュディア王国やアケメネス朝ペルシアの支配を受ける一方、ヘレニズム都市として繁栄した。この地に紀元前 323 年に再建されたアルテミス神殿は世界の七不思議に入るほど壮大なものであった。以下の引用は紀元前 2 世紀後半にエフェソスを訪れたシドンのアンティパトレスの叙述による。

私は戦車が通りうるほど広いバビロンの城壁を見、アルペイオス河畔のゼウス像を見た。空中庭園も、ヘリオスの巨像も、多くの人々の労働の結集たる大ピラミッドも、はたまたマウソロスの巨大な霊廟も見た。しかし、アルテミスの宮がはるか雲を突いてそびえているのを見たとき、その他の驚きはすっかり霞んでしまった。私は言った、「見よ、オリンポスを別にすれば、かつて日の下にこれほどのものはなかった」

－ アンティパトレス、『パラティン詩選集』9 巻 58

紀元前 133 年にエフェソスはローマに征服されるとアジア属州の中心都市として繁栄し、のちにはアントニウスとクレオパトラの会談も開かれた。また、エフェソスには早くからキリスト教が伝来し、現地のアルテミス信仰と激しく対立した。これは新約聖書中の

『エフェソの信徒への手紙』にも残っている。ちなみに、アルテミス神殿は3世紀のゲルマン人侵入やキリスト教の浸透により荒廃し、現在ではその原型をとどめていない。

2. 史料脚注等

(A)

L1 ティベリオス＝クラウディオス＝アンティパトロス＝ユリアノス

エフェソス市参事会の議長・市民代表

L1 ポセイデオン月

古代ギリシャ暦の月。太陽暦 11/16~12/14 を指す。

L6 「この都市～ふさわしい」(第三段落)

市民としてエフェソス市に尽くす(都市やアルテミス神殿への寄進か?)者に名誉を与えるべきだとする決議。

L11 ガイオス＝ウィビオス＝サルタリオス

この決議の主人公。アルテミス神殿への寄進・祭祀を行う人。

L11 騎士身分

ローマの騎士身分は中世の騎士と異なり、重装歩兵民主制下で騎兵を務めた階級、つまり馬を飼うことのできた富裕層を意味する。

L19 インペラトル～ダキクス

トラヤヌス帝(在位 98~117)を指す。ダキア・メソポタミアを征服し、ローマ帝国最大領土を実現。

L20 プロティナ

トラヤヌス帝の妃、トラヤヌス帝との間に子はおらず、トラヤヌス帝の遠縁の親戚であるハドリアヌスを養子に迎える。

L24 マグネシア門

別資料の地図 70

L24 劇場

別資料の地図 26

L27 「そして、彼の手～貸し出して」

サルタリオスが貸金業を行っていたという意味、または、サルタリオスが市や諸団体に献金した分の基金の運用(貸付等)を自ら行っていたということか?(筆者注)自分としては後者の説が自然に思える。

L28 ドラクマ

ギリシアの貨幣単位(銀貨)で銀 4.3g を指す。ローマの貨幣であるデナリウスとほぼ等価。

L28 アス

ローマの貨幣単位。1 デナリウス＝1 ドラクマ＝16 アス(前2世紀以前は 10 アス)

L29 女神の誕生日

アルテミスの誕生日であるタルゲリオン月(太陽暦 4/24~5/23)の 6 日を指す。太陽暦の 4/29 頃か。

L30 「彼は～都市に支払うだろう」

おそらく、サルタリオスが都市やそれに属する諸団体・階級代表に献金することを言っているのではないかと思われる。

L31 集団の指導者

L27-28 のエフェソスの参事会・長老会・市民・青年・童子(パイデス)を指す。

L33 州総督(プロコンスル)

共和政期ローマでは属州総督は通例、執政官経験者(プロコンスル)や法務官経験者(プロプラエトル)が任命されていたが、アウグストゥスによる帝政開始後は属州が元老院属州と皇帝属州(エジプトは例外的に皇帝の私領扱い)に二分され、比較的治安が良く戦乱に巻き込まれる危険性の低い元老院属州は元老院が総督任命権をもつ(共和政時代と同様に執政官・法務官経験者を任命することが多い)一方で、辺境地域に位置して異民族の侵入の恐れがあり、多くの軍団の駐屯を必要とする皇帝属州は皇帝が任命権を持っていた(軍団の指揮能力に長けた将軍を任命することが多かった)。これは 3 世紀末のディオクレティアヌスの改革まで制度としては機能していた。

なお、エフェソスが属するアジア属州は元老院属州であったため、元老院が総督任命権を持っていた。つまり、アクィリオス=プロクロスは元老院議員であり(あった)、プロコンスル資格で属州総督を務めている可能性が高い。

L33 法務官(プラエトル)

共和政ローマ下では執政官に次ぐ権力を持ち、軍団の指揮権を含む大きな権限を持っていた。また、任期終了後はプロプラエトル資格で属州総督となることができる。「法務官級」がどういう意味かは不明。プロコンスルに次ぐという意味でアジア属州副総督くらいの意味か？

L35 市民

エフェソス市民のことをさすのか、ローマ市民権所有者という意味をさすかは不明。

L37 「以下のように決議した」

ここから、参事会の決議内容詳細に入る。

L46 「主たるアルテミスへの追加の化粧」

アルテミス神殿への寄進(という名目のエフェソス市への罰金支払いの可能性とも解釈できる)

L46 「主たるカエサルの金庫」

皇帝(トラヤヌス帝)の治めるローマ帝国の国庫のことだと思われる

L46 25,000 デナリウス

ローマ時代の貨幣単位を現代の貨幣単位と比較するのは困難だが、トラヤヌス帝時代のローマ軍団兵の年収は 300 デナリウスであることを考えれば相当な金額である。

L49-51 「彼によって提起され～(2行ほど欠)～気前良さと徳の見返りとして」

おそらく欠落部分は「この決議内容とサルタリオスの名を永久に記録した石板を設置する」的な話の可能性が高い。

L51 「彼の手～約束した」

意味不明。あくまで仮説・推測の域を出ないが、サルタリオス自身が基金を作ったうえでその基金の運用を自ら行い、その利益を市に献じるということではないか。

L53 神殿守たる市民団

アルテミス神殿の存在はエフェソスの誇りであり、エフェソス市民の誇りであったことは想像に難くない。

(B)

ここでは(A)と同じ出来事について記述していることを留意されたし。

L1-3 「セクストス＝アッティオス＝スプラトス～ポセイドン月の…日に」

古代ローマでは「〇〇と××が執政官であった年」という言い方でその年を表現していた(日本の元号と同じ)。ちなみにここで言及されている年は西暦 104 年である。この時点では、まだダキアの征服は完了していないが、102 年の第一次ダキア戦争後に元老院はトラヤヌスにダキクス(ダキアの征服者)の称号を贈っており、(A)の記述および L11 の記述にあるトラヤヌス帝の称号の記述と矛盾しない。

L4-10 「ガイオスの子～20000 デナリウスを捧げた」

(A) と同内容。なお、ここではサルタリオスの献金額が 20000 デナリウスと明示されている。

L11 「インペラトル＝カエサル～ダキクス」

トラヤヌス帝を指す。これ以降、(A)でも記述された「肖像」の詳細が述べられる。

L12 リトラ・ウンキア

どちらも古代ローマの重量単位。ウンキアは「12 分の 1」を意味するラテン語に由来。1 リトラ＝約 326g＝12 ウンキア

L13-16 「これらは奉納者～という条件である」

これらはどうやらエフェソスの民会に捧げられたものらしい。これ以降、(A)でも登場した肖像(≠模像)の行き先が述べられる。なお、アルテミス女神は現世に実際の姿を現しているわけではないのでその姿を模した像が作られるのである。

L17-33 「黄金製のアルテミス像～捧げられる。」

(A)でも登場した(16 行欠)の部分も含まれ、模像・肖像がどういうものか説明している。

L38-41 「上記の模像～奉納物なのだから」

アルテミスの模像は民会・供犠(動物の生贄をささげる祭り)の際に用いられる。

L42 「民会の解散後には～運び出され」

アルテミス像は普段は神殿に安置されている

L44-45 「マグネシア門～随行すること」

ここから推測されるアルテミス像の運搬ルートは、別紙の地図を参照すれば

74(神殿)→SACRED WAY:KATHODOS→70(マグネシア門)→26(劇場)→

20→SACRED WAY:ANODOS(DIRETISSIMA)→74(神殿)

L52 毎年9%の利子

サルタリオスの献じた基金からの利益を指す。

L53-68 「参事会書記に 450 デナリウス～15 デナリウスと 13.5 アスを渡すだろう。」

1800 デナリウスの使い道について。具体的にはアルテミス女神の誕生日に行われる
富くじのようなもの。

L69-74 「それゆえ～返却すべし」

サルタリオスの 20000 デナリウスの基金を(サルタリオスの死後または生前のサル
タリオスから)購入する権利とそれに付随する諸規定。購入者はサルタリオスの代わ
りに 1800 デナリウスを拠出することを求められる。

L75-78 「そして、20000 デナリウス～責を負うことになる。」

サルタリオスの相続人はサルタリオスの死後もこの 20000 デナリウスの元本と
1800 デナリウスの利子の運用を絶やさず継続する義務がある。

L88-89 「私、ガイオスの子～捧げた」

この提案がサルタリオス自身によるものであることを示す。

歴史 I 第四回史料について

【史料】ルーキアーノス著・高津春繁訳『偽予言者アレクサンドロス』（『遊女の対話 他三篇』岩波書店、1961）

1. 前提

ルーキアーノスについて

ルーキアーノス（120 頃～180 年以降）は 120 年頃、ローマ帝国シリア属州のサモサタに生まれ、その生涯で 80 編以上の風刺作品を著した。彼はシリア出身であるがその著作はギリシア語で著されており、彼自身も 180 年以降に、ギリシアのアテネで没した。

彼の作品は当時流行していた新興宗教やキリスト教を批判的に風刺したものが多く、当時の社会・政治状況を示すものとして価値は高いものの、残念ながら日本では知名度が低く、訳書も少ない。彼の代表作は『神々の対話』『遊女の対話』『本当の話』などが知られ、月への旅を著した『本当の話』は最古のサイエンス・フィクションといわれることもある。また、彼はエピクロス派哲学を支持していたとも言われている。「偽予言者アレクサンドロス」で彼が言葉を尽くしてアレクサンドロスを批判していた背景には、アレクサンドロスがエピクロス派と敵対していたから、または文章を捧げたケルソスがエピクロス派だったからとされている。



2. 資料脚注等

-----ここから 105 ページ-----

L1 ケルソス君

ルーキアーノスの友人。彼はルーキアーノスと同様にエピクロス派に属し、『魔術師を駁する』という書を著した。

L1 アボーノテイコス

偽予言者アレクサンドロスが生まれ、また彼が活動していた地。小アジア・パフラゴニア地方(アナトリア半島の黒海沿岸)に位置する。後に偽予言者アレクサンドロスがマルクス・アウレリウス帝に願い出てイオーノポリスと改名した。

L4 ピリッポス

マケドニア王ピリッポス 2 世(在位前 359~336)を指す。前 338 年、カイロネイアの戦いに勝利し、コリントス同盟を創設。全ギリシアに覇権を唱えるが、前 336 年に暗殺される。

L4 ピリッポスの子アレクサンドロス

マケドニア王アレクサンドロス 3 世(以下：アレクサンドロス大王とする)急逝した父の跡を継ぎ、東方遠征を行う。アケメネス朝ペルシアを滅ぼし、エジプトを征服したのち、インダス川に達する大帝国を築き、ヘレニズム文化の発展のきっかけとなった。しかし前 323 年、わずか 32 歳で病死。以後、オリエントはローマ帝国の制服を受けるまで多数の王国が割拠する。ギリシアの英雄であるアレクサンドロス大王の功業はギリシア文化の影響を深く受けた地中海世界(ローマを含む)全域に伝えられ、地中海世界の人々の意識や著作に深い影響を与えたことは特記すべきである。

L5 このアレクサンドロス

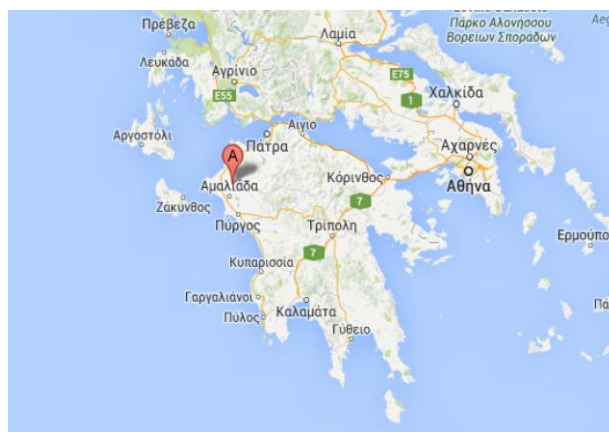
「偽予言者アレクサンドロス」のこと。

L5 かのアレクサンドロス

「アレクサンドロス大王」のこと。

L7-10 「アウゲイアースの牛小屋～努めてみよう」

「アウゲイアースの牛小屋掃除」はギリシア神話の英雄、ヘラクレスのなした 12 の功績のうちの一つ。アウゲイアースはエーリス王（エーリスはペロポネソス半島西部、イオニア海に面する地方・右図 A）で、彼の牛糞にまみれた牛小屋をヘラクレスが一日で掃除したという伝説にちなむ。ここでの「糞」は偽予言者アレクサンドロスの悪行の数々をさすか？



L12-13 「教養のある～見世物となるべき人間」

おそらく、偽予言者アレクサンドロスのことを指す。ローマでは猛獣を使って死刑囚を殺させる刑罰があり、ここでは偽予言者アレクサンドロスの如き者は猛獣でもない猿や狐に殺されるのがふさわしい、という程度の意味。

L15 エピクテートス

帝政ローマ初期のストア派哲学者、エピクテートス(50 頃-135 頃)のこと。小アジアのフリギア生まれ、一時は奴隷身分に落ちるのちに解放されて哲学者となる。生涯迫害され続ける不遇の人生を歩むが、その「平静」「平等」を説く思想は後の「哲人皇帝」マルクス・アウレリウス・アントニヌスの思想に受け継がれていく。

L16 アリアーヌス

2世紀のローマの叙述家にして政治家、フラウィウス・アッリアノス(86頃-160頃)のこと。彼自身はギリシア人であるが、ローマ市民権所有者であったため本文中では「ローマ人(L15)」と述べられている。彼はエピクテトスに師事し、彼の言葉を『語録』という著作で残した。代表作に『アレクサンドロス東征記』が知られている。彼は政治家・軍人としても有能で、トラヤヌス帝・ハドリアヌス帝に仕えて執政官や属州総督を歴任した。

L14-16 「しかし誰かが〜同じ目に会っている」

悪人である偽予言者アレクサンドロスについて著作をなすことについての世人の批判に対し、偉大な叙述家であるアリアーヌス(著者のルーキアーノスとほぼ同時代人)も悪人(後述)について書いているのではないか、と反論している。

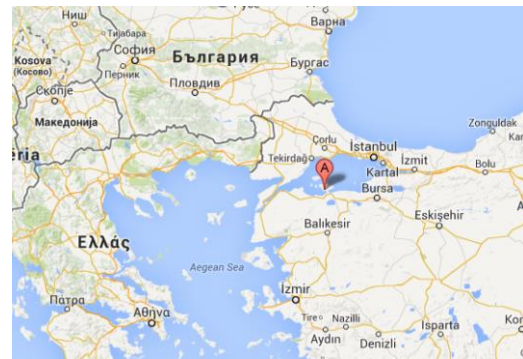
-----ここから 106 ページ-----

L17 匪賊ティロロポス

作家アリアーヌスが著作の題材にしたといわれる盗賊。

L18 ミューシア

小アジア地方、ダーダネルス海峡に面する地方(右図)。古くよりギリシア人の植民活動が活発であり、ホメロス『イーリアス』にもトロイアの同盟国として登場する。



L18 イダ山

小アジア地方、ダーダネルス海峡に面する山。この山は古来よりキュベレー(小アジアで広く崇拝されてきた地母神でギリシア・ローマでも Μητηρ Θεων Ιδαια(メーテル・テオーン・イーダイア)や Magna Mater(マグナ・マーテル)と呼ばれて尊崇を集めた)崇拝の聖地として知られる。

L18-21 「アジアの〜となるだろう」

ティロロポスはアジア属州の周辺だけを略奪して回った一方で、偽予言者アレクサンドロスはその詐欺的行為でローマ帝国中を混乱させたのでこちらのほうがより大悪人であると述べようとしている。

L28 ヘーラクレス

ギリシア神話の半人半神の英雄。最高神ゼウスとミケーネ王女アルクメーネーの間に生まれる。その生涯で12の試練を成し遂げたことで知られる。ローマでも広く尊崇された。

L28 守りの神ゼウス

ギリシア神話の最高神ゼウスのこと。

L28-29 救済者ディオスクーロイ

ゼウスとスパルタ王妃レーダーの間に生まれた双子、カストルとポリュデウケース(ポルックス)のこと。航海の守護者として知られる。

L29 「われわれの仇～ありますように」

偽予言者アレクサンドロスの頭脳や魂について修辞を尽くして批判している。

L33 ケルコープス

ギリシア神話に登場するオケアノスの息子である二人の兄弟。ゼウスにいたずらしたため石に変えられた。または他の人名をさすか？詳細不明。

L33 エウリュバトス・プリュノーンドス

古代ギリシアの悪党の代名詞。

-----ここから 107 ページ-----

L34 アリストデーモス・ソーストラトス

古代ギリシアの悪人。兩人とも同名者が多すぎるため、特定困難。

L36 ピュータゴラス

古代ギリシアの数学者・哲学者であるピタゴラス(前 582~496)のこと。サモス島に生れ、万物の根源(アルケー)を「数」だと考えるピタゴラス学派を創設。この学派は秘密結社的な性格を持ち、しばしば「ピタゴラス教団」ともいわれる。他に三平方の定理の発見や音律の研究を行った。

L37 彼は賢者で神のごとき叡智の持主

ピュータゴラスのこと。

L37-38 「この男と～見えるだろう」

ピタゴラスの叡智でさえ、偽予言者アレクサンドロスの悪知恵に比べれば子供のようなものである、ということ。

L43 誣罔

「ふもう」と読む。嘘を言って人を貶めること。

-----ここから 108 ページ-----

L58 テュアーナ

小アジア・カッパドキア地方(右図 Cappadocia の部分)の中心都市。

後述するテュアーナのアポローニオスを輩出する。



L58 かの名高いアポローニオス

帝政初期の哲学者、テュアーナのアポローニオス

(15 頃~100 頃)のこと(右図)。彼はテュアーナに生まれたのち、新ピタゴラス学派に属し、各地を放浪して哲学を説き、一説にはパルティアを通過してインドまで赴いたともいわれる。彼はまた魔術や神秘主義にも傾倒し、数々の奇跡を起こしたとされ、イエス・キリストと同時代人であることから反キリスト教派に聖人として崇拝された。ここで着目すべきはルーキアーノスは偽予言者アレクサンドロス



に限らずこうした教団をも批判している点である。

L59 お芝居

前述のとおり、ルーキアーノスはアポローニオスを崇拝する人々を批判的なまなざしでとらえており、ここでもアポローニオスの起こしたとされる数々の奇跡を「お芝居」だとして批判している。ここから、2 行前の「名高い」というアポローニオスの形容は皮肉ともとらえられる。

L67 ビーテューニア

アナトリア半島黒海沿岸、偽予言者アレクサンドロスの生まれたパフラゴニアのすぐ西に位置するローマの属州。前項地図の Bithynia の部分。

L67 マケドニア諸王

紀元前 7 世紀頃からアルゲアス朝・アンティゴノス朝の下で繁栄したマケドニア王国のこと。アルゲアス朝時代にはピリッポス 2 世がギリシアを征服し、アレクサンドロス大王が大帝国を築くなど最盛期を迎えたが、アレクサンドロス大王の死後にマケドニアはアンティゴノス朝に取って代わられた。アンティゴノス朝は第二次ポエニ戦争に介入してローマと対立し、紀元前 168 年にローマに征服された。これにより、繁栄を極めたマケドニアもローマの一属州に転落した。

-----ここから 109 ページ-----

L68 ペラ(右図)

紀元前 399 年、アルゲアス朝マケドニア王国の国王、アルラケオス 1 世により建設される。以降アルゲアス朝・アンティゴノス朝を通じてマケドニア王国の首都として、またギリシア・ヘレニズム文化の中心的都市の一つとして繁栄した。しかし、ローマによる征服後に衰退した。ルーキアーノスが活躍した 2 世紀にはもはや廃墟同然であったといわれる。



L70 おだやかで慣れた大蛇

ここで登場する大蛇はラテン語で *Anguis Aesculapii* と言われる種類(学名: *Zamenis Longissimus*、英名: *Aesculapian Snake*、右図)で南ヨーロッパ全域に広く分布する。この蛇はアスクレピオースの杖に巻き付いている蛇であるといわれる。長さは長いもので 2m を越える。



L71 オリュムピアス

マケドニア王ピリッポス 2 世の王妃にしてアレクサンドロス大王の母、オリュンピアス(前 375~316)のこと。彼女は一説にはマイナス(狂信的デュオニュソス崇拝者)であり、常に蛇とともに寝ていたといわれる(プルタルコスによる)。そのため、アレクサンドロス大王の父親は蛇に化けたゼウスとも言われ、これはアレクサンドロス大王・オリュンピアス自身も主張しており、アレクサンドロス大王のエジプト支配の正当化にも使われた(エジプトのファラオとなる要件には神性が求められる)。

L72 彼女に関する話

オリュンピアスがアレクサンドロス大王を出産した経緯についてはさまざまな神話的な言い伝えが残っている。

L73 銅銭(オボロス)

ギリシアの貨幣単位。1 オボロス = 1/6 ドラクマ ≒ 1 デナリウス

L73-74 トゥーキューディデース

アテネ生まれの歴史家、将軍(ストラテゴス)、トゥキディデス(前 460 頃~前 395)のこと。ペロポネソス戦争を描いた『戦史(歴史とも)』を著す。『戦史』は中立的・客観的な視点から戦争を見た書物として史料価値が高い。

L79 「デルポイ〜ブランギタイ」

古代ギリシアで有名な聖地の数々。とくにデルポイは神託で有名であった。

L79-81 「先に述べた暴君〜発見した」

ここは、偽予言者アレクサンドロスとコッコーナスという二人の悪人の立場を借りて著者のルーキアーノス自身が暗に古代ギリシアの神託を得ることを目的とした崇拜を批判しているともとれる。ルーキアーノスの属したエピクロス派は「神」への信仰を絶対視せず、「神」自身すら相対化する傾向にあった。

-----ここから 110 ページ-----

L86 カルケー ドーン

ボスポラス海峡に面する小アジアの都市で交通の要衝。はるか後の 451 年、この地でキリスト教の公会議が開かれた。

L86 トラーキア

ボスポラス海峡の欧州側(右図の濃い部分)。現在のブルガリア南部～ギリシア東部～トルコの欧州側にあたる地域。紀元前 1 世紀の奴隷反乱の指導者、スパルタクスの生まれ故郷。



L95 「とにかく～思われたから」

ビテュニアのカルケドンは当時から交通の要衝として知られ、彼らが名を売るにはもってこいであったが、住民が純朴で迷信を信じやすいという点では偽予言者アレクサンドロスの故郷であるパフラゴニアのアボーノテイコスの方がよかったのであろう。

L96 アポローン

ゼウスとレートーの子。アルテミスとは双子の兄。神託をなす神、そして芸術の神としてギリシア文化圏で広く崇拜される。中でもデルポイのアポローン神殿の神託は有名であり、ペルシア戦争の勝利を支えたとも言われる。のちにローマでは太陽神とされた。

L96 アスクレーピオス

アポローンとコロニス(テッサリア地方の領主の娘)の子。生後すぐに母を失い、ケンタウロス(半人半馬の種族)のケイローンに育てられる。成長して医者となったが、死者を甦らせたとしてゼウスに殺された。彼の用いた蛇の巻き付いた杖は「アスクレピオースの杖」(右図)として現代でも「医」の象徴として用いられる。



-----ここから 111 ページ-----

L103 ペルセウス式に鎌を手をしている

ギリシア神話の英雄ペルセウスは怪物メデューサの首を切断するときに鎌のような曲刀を用いたとされている(右図)。これを利用して偽予言者アレクサンドロスは自分をペルセウスの後裔だと信じ込ませようとした。



L106 ポイボス

アポローンの別名。「輝く神」程度の意味。ローマ神話においてアポローンを太陽神だと解釈する根拠となった。

L107 ポダレイリオス

アスクレピオースの子、アポローンの孫。父親と同様に医者であり、内科専門の名医であったといわれる。トロイア戦争にもギリシア側で参戦した。

L109 トリッカ

ギリシア、テッサリア地方北西部の都市(現在のトリカラ)。アスクレピオースの出身地とも言われる。アスクレピオース神殿があり、現在もその遺跡が残る。

L108-109 「どうも～ものと見える」

偽予言者アレクサンドロスの「アポローン・アスクレピオース・ポダレイリオスの子孫」という主張に対する皮肉。彼らはみなボスボラス海峡西側のギリシア本土に生れており、偽予言者アレクサンドロスの生まれたパフラゴニアのアボーノティコスとは何の関係もない。

L110 シビュラ

固有名詞か一般名詞かは曖昧であるが、おもにデルポイなどでアポローンの神託を受け取っていた巫女。前7世紀のイオニア地方で生まれたとされる。もともとはオリエント的な巫女であったか？

L111 シノーペー

パフラゴニア地方のギリシア植民市。アボーノティコスにほど近い。

L111 エウクセイノス

黒海(Black Sea)のこと。

L112 アウソニア

もともとはギリシア人が植民活動の盛んだった南イタリア(マグナ・グラエキア)を指して言った言葉。転じてイタリア全体、さらに転じてローマの雅称となる。ここでの「アウソニア人」はローマ人のこと。

L113-114 「初めの一と三十～数えたるもの」

1,20.5.60 はギリシア文字で数字として表すと ALEX となり、つまり偽予言者アレクサンドロス本人をあらわす。

L116 気が狂ってる真似

古代ギリシア・オリエント・ローマに限らず世界中で神がかり状態になった予言者はしばしば発狂したような状態を呈する。

-----ここから 112 ページ-----

L118-121 「その上ずっと以前〜引っぱられているのだった。」

アスクレピオースの使いとして知られている大蛇を偽予言者アレクサンドロスは利用しようとした。そこで蛇に神託を言わせるために腹話術のような仕掛けを用意した。

L129 大地女神

フリギア地方を中心に小アジアで広く崇拝される地母神、キュベレーのこと。キュベレーの崇拝者は狂乱に満ちた祭儀をすることで有名であった。

-----ここから 113 ページ-----

L145-146 コローニス

テッサリア領主プレギュアースの娘。アポローンとの間にアスクレピオースを生む。

-----ここから 114 ページ-----

L167 ポントス

アナトリア半島黒海沿岸東部、ビテュニアの東隣にあるローマの属州。

L167-168 のろ間で無教育な人間

地中海沿岸に対して黒海沿岸のパフラゴニアやポントスは後進地域であった。なお、ルーキアーノスは繁栄を極めていたオリエントの中心地、シリア生れである。
ここから、偽予言者アレクサンドロスにいとも簡単にだまされるパフラゴニア人やポントス人を憐れみながらもその知恵のなさを暗に蔑視している点が見受けられる。

-----ここから 115 ページ-----

L172 デーモクリトス

トラキア生まれの哲学者、デモクリトス(前 460 頃〜370 頃)。万物の根源を原子だとした。彼は亡霊などの非現実的なものを信じなかったといわれる。

L173 エピクローロス

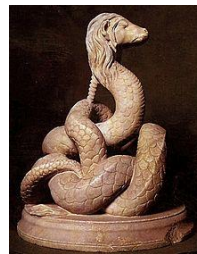
サモス島生まれの哲学者、エピクロス(前 341~270)のこと。精神的な安寧を追求するエピクロス派の創始者。神への絶対的帰依については懐疑的で、「我々はパンと水さえあれば神と幸福を競うことができる」という言葉が有名。これによりエピクロス派は偽予言者アレクサンドロスの宗教結社と激しく対立する。なお、ルーキアーノスおよびケルソスはエピクロスの教えに深く賛同しており、この点で偽予言者アレクサンドロスに対しての批判に感情的な点が見受けられる。この点は留意しなければならないだろう。

L173 メトロドーロス

メトロドーロス自体は同名者が多く、特定は困難。ここではキオスのメトロドーロス(前 4 世紀ごろのエピクロス以前の哲学者)、またはランプサコスのメトロドーロス(前 331 頃~278 頃、the younger の方)であろう。後者はエピクロスの弟子。

L179 グリュコーン

偽予言者アレクサンドロスがアスクレピオースの神体としてパフラゴニア人を欺くのに利用した大蛇に人間や他の動物の頭がついたもの(右図)。「グリュコーン」という言葉自体は偽予言者アレクサンドロスが作ったのではなく、前 1



世紀の作家ホラティウスの著作にすでに登場するため、「蛇神」の信仰はそれ以前からあったとされている。

L180 ゼウスの孫

アスクレピオースはアポローンの子であるが、アポローンはゼウスの子であるため、アスクレピオースはゼウスの孫であるという認識ができる。

L183 アムピロコス

キリキア生まれの予言者。トロイア戦争に参戦後、小アジアにギリシア人植民市を建設する。

L183 アムビアラーオス

アムピロコスの父。ギリシアの英雄であり予言者。テーバイとの戦いの最中、ゼウスの投じた雷で生じた地割れに飲み込まれて姿を消す。ここでの「死んで、テーバイにおいて姿を消した」はその伝説を踏まえている。

-----ここから 117 ページ-----

L205 瀝青

天然の固体~液体形状をとる炭化水素。アスファルトやコールタールのこと。

L213 君が魔術師を攻撃して書いた~書物

ケルソスが書いたといわれる『魔術師を駁する』という著作。この著作は現存しないものの、ローマのヒッポリュトス(170 頃～235、対立教皇・聖人)の代表作である『全異端反駁』に著者ヒッポリュトスがケルソスの記述を参考にしたと思われる部分がある。

-----ここから 118 ページ-----

L231-232 すでに死んだ者をさえ復活させた

アスクレピオースはその卓越した医療技術を用いて死者の蘇生を行ったとされる。しかしこれは冥界の神であるハデスから世界の秩序を壊すと非難されたため、アスクレピオースはゼウスの雷に打たれて死ぬこととなる。

-----ここから 119 ページ-----

L239 無神論者やキリスト教徒

無神論者はエピクロス派に多く、古代ローマではルクレティウス(前 99 頃～55)が有名。彼はエピクロス派の考えに基づき、無神論的思想により死の恐怖から人々を解き放つために『事物の本性について』を著した。また、この文章が書かれた 2 世紀にはキリスト教が小アジア(ポントスを含む)で信者を増やしつつあった。

L239-240 「この人たち～あえて言っていた」

エピクロス派は無神論的立場から、キリスト教徒は一神教的立場から偽予言者アレクサンドロスの新宗教を批判していた。

L245-246 「その来詣者たち～思われるだろう。」

400 年以上昔の哲学者、エピクロスのことは知っているのに偽予言者アレクサンドロスの荒唐無稽な嘘は見抜けない偽予言者アレクサンドロスの信奉者たちに対する皮肉。

L248-250 「いったい、いんちき経験者で～他にいるだろうか。」

「いんちき経験者」「いかさまが好き」「真理の最悪の敵」とは偽予言者アレクサンドロスを指す。ここで著者のルーキアーノスが偽予言者アレクサンドロスを言葉を尽くして批判しているのは彼の詐欺行為に対する義憤以上に、自らの信奉するエピクロスと敵対的であり、自らと同じエピクロス派を排斥していることに対する憤りからだろう。これは、「事物の性質を看破し、ただ一人その中に内在する真理を知っているエピクローロス」と述べている点からもわかる。これ以降、ルーキアーノスは徐々に論調・語気における冷静さや余裕を失い始める。

L250 クリュージッポス

ストア派の大成者、ソロイのクリュシッポス(前 280 頃～207 頃)のこと。ローマ世界では著作の少ないゼノン(ストア派創始者)より多数の著作を残したクリュシッポスの方が有名であった可能性がある。

L250-251 「プラトーンや～深い平和が保たれた」

偽予言者アレクサンドロスに対して無神論者・エピクロス派・キリスト教徒は激しい批判を加えた一方、プラトーン派・(新)ピタゴラス派は神秘主義的要素があったために偽予言者アレクサンドロスを激しく非難しなかった。ストア派もまた同じだと思われる。

L252 かかる事を笑い飛ばし、戯談にしていた

エピクロスは現世の人間に対する「神の干渉」を否定しており、偽予言者アレクサンドロスの「神託」のようなものも当然否定の対象になった。

L253 レピドゥス

ポントスの司祭長にしてアマストリス市参事会長のティベリウス・クラウディウス・レピドゥスのこと。司祭長は主にローマ皇帝崇拝を管掌していたとされる。彼はエピクロス派に属していたといわれる。

L254 アマストリス

ポントス属州の首都。アボーノティコスに西に位置する黒海に面した都市。

-----ここから 120 ページ-----

L267 アルメニア

アルメニア王国(右図オレンジ色部分とほぼ重なる)のこと。ローマとパルティアの間の緩衝国として命脈を保ち続ける。この国の王が親ローマ派か親パルティア派かでローマ・パルティア双方の外交情勢が大きく変化した。この文章が書かれた2世紀ごろは、161年にアントニヌス・ピウス帝の死に乗じてパルティア王ヴォログセス4世が親ローマ政権下のアルメニアに侵攻し、親パルティア政権を成立させたことによりローマが反発、第六次ローマ＝パルティア戦争が勃発した。



L267 セヴェリアヌス

ガリア出身の軍人でカッパドキア属州総督、マルクス・セダティウス・セヴェリアヌスのこと。偽予言者アレクサンドロスの神託を信じてアルメニアに侵攻したがエレゲイアでパルティア軍に包囲されて自害。彼の率いたカッパドキア駐屯の軍団は

全滅した。この後、ローマ皇帝ルキウス・ウェルス(マルクス・アウレリウス・アントニヌス帝との共同皇帝)率いる援軍が駆けつけて戦況は逆転し、163年にアルメニアを占領して親ローマ政権を復活させた。ルキウス帝はその余勢をかってバビロニアに侵攻し、パルティアの首都クテシフォンを攻略した。しかし、天然痘の蔓延や北方でのゲルマン人侵入によりルキウス帝らローマ軍は撤退し、ヴォログセス4世は一時的に危機を脱したものの、166年にローマ軍が再びメディアを占領するとヴォログセス4世はローマに有利な講和を強いられた。169年にルキウス帝が、180年にマルクス・アウレリウス・アントニヌス帝が死ぬとヴォログセス4世は再びアルメニアに侵攻して占領、自らアルメニア王を称した。191年にヴォログセス4世が死んだのち、パルティアは激しい王位争いの末、ヴォログセス5世が王位を継いだ。彼はローマ帝国内の帝位争いに介入してシリアに侵入したが失敗し、帝位を確定させたセプティミウス・セウェルス帝はパルティアに対して大規模な侵攻作戦を展開し、198年ごろには再びクテシフォンを攻め落とし、大規模な略奪をおこなった。こののち、パルティアは再び王位争いにより国力が低下し、3世紀はじめにはアルダシールらサーサーン朝の勢力拡大を止められず、226年に滅亡した。ローマ帝国もまもなく軍人皇帝時代に突入し、東方では260年にウァレリアヌス帝がサーサーン朝軍の捕虜になるなどローマの勢力が退潮していく。そして、ローマが東方にふたたび注力しはじめるのは284年以降、つまりディオクレティアヌス以降である。

L271 ティベルの輝かしき水

テヴェレ川のこと。アペニン山脈中のモンテ・フマイオーロに源を発し、ローマ市内を貫流してティレニア海に注ぐ。河口はカスプ状三角州で有名。ここではローマの枕詞のようなもの。

-----ここから 121 ページ-----

L273 馬鹿者のケルト人

ケルトはギリシア人がガリア(現在のフランス)を指している言葉。偽予言者アレクサンドロスの神託を信じてアルメニアに侵攻して惨敗したセヴェリアヌスはガリアの生れである。

L273 オスロエース

セヴェリアヌス率いるローマ軍を破ったパルティアの将軍の名。

-----ここから 122 ページ-----

L294 ルーティリアーヌス

ローマの政治家、プブリウス・ムンミウス・ルティリアヌスのこと。彼は 146 年に補充執政官(*consul suffectus*)に選出されたローマの名士で、偽予言者アレクサンドロスと出会ったときはアジア属州総督を務めていた。彼は優秀な人物であったがいささか狂信癖があったとルーキアーノスは評している。ルーキアーノスは彼と顔見知りであったことが後述される。

L299 ほとんど委嘱せられた職務を捨てて

ルティリアヌスは当時アジア属州総督(プロコンスル資格)であり、偽予言者アレクサンドロスの活動していたビテュニアやポントスは管轄外であった。

L305 宮廷の大部分の者を騒がせた

ここでいう「宮廷」は元老院のことを指す可能性が高い。ルティリアヌス自身が執政官経験者であり、元老院属州(アジア)の属州総督を務めていることから彼自身も元老院議員であったと考えられる。

-----ここから 124 ページ-----

L325-327 「アレクサンドロスが〜あろう」

「かかる小人」は偽予言者アレクサンドロスがインチキな予言に失敗したのにそれを非難せず、むしろ弁護する(おそらく相当な金は払っているのにもかかわらず)ルティリアヌスのお人よしさを批判している言葉。その後は反語になっていることから、「偽予言者アレクサンドロスがルティリアヌスや他の信者のバカさ加減を笑うだけではなく、彼らから不正に金品その他を詐取しているから、私(ルーキアーノス)は偽予言者アレクサンドロスを批判する」くらいの意味だろうか? ルーキアーノスは偽予言者アレクサンドロスを盲信して疑わない信者たち(ルティリアヌス含む)の態度もこの前後で批判している。

L328-329 ペーレウスの子、次にメナンドロス

ペーレウスはギリシア神話の英雄で、海の女神テティスと結婚する。彼の息子にトロイア戦争の英雄アキレウスがいる。メナンドロス(前 342~292/291)はアテネ生まれの喜劇作家。「新喜劇」最大の劇作家としてローマでも知られる。

L335 月の女神

ギリシア神話の月の女神、セレーネーのこと。

L337-338 「月の女神が〜彼女の癖なのさ」

セレーネーは美少年エンデュミオンを愛し、ゼウスに依頼して彼に不老不死の眠りを与えたという伝説から。この伝説を踏まえて、偽予言者アレクサンドロスは自分の娘を月の女神との娘だと主張した。ここでルーキアーノスが言っている「美少年」は当然偽予言者アレクサンドロスを指すのだが、これも後でわかるが痛快な皮肉となっている。

L338 賢者の中の賢者

偽予言者アレクサンドロスの神託を盲信し、自分の滑稽な行動が見えていないルティリアヌスに対する痛烈な皮肉。

L338-341 「ルーティリアーヌス～気でいた」

ルティリアヌスは偽予言者アレクサンドロスの娘をセレーネーの娘だと信じて彼女と結婚する。これにより、偽予言者アレクサンドロスはローマの重鎮ともいうべきルティリアヌスの縁故者となることでローマ帝国全土に自身の信者を増やすことが可能となった。

-----ここから 125 ページ-----

L345 例の疫病

165 年頃からローマ帝国東方諸属州を中心に発生した天然痘の大流行。「アントニヌスの疫病」とも呼ばれる。第六次ローマ＝パルティア戦争に従軍した兵士たちによってローマ帝国西方にももたらされ、ローマ市内でも多くの死者を出した。歴史家カシウス・ディオによれば一日で 2000 人が死んだといわれ、十数年にわたって影響は継続し、最終的には 500 万人以上が死亡したといわれる。マルクス・アウレリウス・アントニヌス帝の息子、ウェルスもこの疫病で死んだといわれる。偽予言者アレクサンドロスの一見荒唐無稽に思える新興宗教が広く受容されたのもこうした社会的不安が背景としてあったのではないだろうか。マルクス・アウレリウス・アントニヌス帝の時代は五賢帝時代の末期である。この時代はローマが地中海世界の超大国として輝きを放った最後の時代であった。しかしながら、同時にこの時代というのは、トラヤヌス・ハドリアヌス両皇帝の下での最盛期は過ぎ去り、「3 世紀の危機」の萌芽がそこかしこに現れようとしていた時代でもあった。

L348-349 この言葉が書きつけられた家々が最もひどく空になったのだ

偽予言者アレクサンドロスの神託を盲信し、疫病対策を怠った家は疫病にかかって真っ先に一家全滅したという話か。これは偽予言者アレクサンドロスの神託が実害を出している例として挙げられている(偽予言者アレクサンドロスを盲信する信者への批判もなされているが)。

-----ここから 126 ページ-----

L357 自分の国

おそらく、活動の中心地のある小アジアを指す。

L360 布告

おそらく、直前の「秘蹟」「炬火祭」「神官」の記述より、エレウシスの秘儀の如きものを執り行うという布告か？ちなみに、エレウシスの秘儀とは前 1700 年ごろのミケーネ文明時代から行われた神秘主義的な祭儀で、その内容は完全に秘密とされた。一方でこの儀式はローマ支配下でも継続され、皇帝も参加するなど高い知名度と格式を誇った。エレウシスでは豊穡の女神デメテルとその娘ペルセポネーの信仰が盛んであったため、秘儀と何らかの関係があるとされるが、4 世紀末にローマ帝国がキリスト教を国教化するところした「異教」の祭儀は禁止され、伝統は断絶した。現在、この儀式の全容はいまだ解明されていない。

L360 無神者、基督者、或はエピクーロスの徒

「基督者」はキリスト教徒を指す。この三者は偽予言者アレクサンドロスの宗教を否定する者として偽予言者アレクサンドロスから目の敵にされていた。

L363-365 「レートーの産褥～結婚があった」

ゼウスの子アポローンが生まれ、アポローンの子アスクレピオースを経てその血統が偽予言者アレクサンドロスに受け継がれるまでを演じる。エレウシスの秘儀もこのような「演劇的再現」のようなものであったという説もある。ここの顛末や詳しい説明はすでに行っているため、割愛します。

L366-368 「そして最後に～務める」

自分の娘を月の女神セレーネーの娘だと主張するために自らをエンデュミオンに見立てている。ここの顛末もルーティリアーヌスの件で説明されているので割愛します。

L367 神官長(ヒエロパンテース)

エレウシスの秘儀における最高位の神官を指す。

L373-374 エウモルピダイやケーリュケス

エレウシスの秘儀を代々伝承し、司っていた一族。

-----ここから 127 ページ-----

L378-379 「黄金の太腿～持っているのか」

ピタゴラスは伝承によれば黄金の太腿を持っていたとされる。ここでの偽予言者アレクサンドロスは自分がピタゴラスの転生した姿だと主張するために黄金の太腿を見せる演出をした。

L386 「すべての者に～不敬なり」

地中海世界では古来より男性の同性愛が盛んにおこなわれていた。ハドリアヌス帝と少年アンティノウスの話は有名。偽予言者アレクサンドロスも御多分にもれずその一人であった。

-----ここから 128 ページ-----

L404 バクトラ

中央アジアに位置する交易都市。かつてはバクトリア王国の都として栄えた。ルーキアーノスの時代はクシャーナ朝の下で貿易拠点として繁栄していた。

-----ここから 129 ページ-----

L409 レピドゥス

ポントスの司祭長にしてアマストリス市長のティベリウス・クラウディウス・レピドゥスのこと(L253 参照)。偽予言者アレクサンドロスと敵対していた。

L412-413 「というのは～からである」

ポントスのレピドゥスはエピクロス派であったということを示すか？でなければ偽予言者アレクサンドロスがそこまで明確にレピドゥスに対して敵対する必然性がない。ここでもエピクロスを「賢明な」と叙述していることからルーキアーノスのエピクロスに対する「ひいき」が見て取れる。

L416 アレクサンドレイア

エジプトのアレクサンドリアのこと。アレクサンドロス大王によって建設され、その後のプトレマイオス朝エジプト王国の下で学術都市・貿易拠点として発展した。大図書館や大灯台は有名であり、ローマ時代は名門貴族の子弟の主要な留学先となった。また、その交通の要衝としての開放性ゆえにキリスト教の伝播は早く、福音記者マルコによって1世紀にはすでにアレクサンドリア教会が設立されたといわれている。

L417 ガラティア

アナトリア半島中央部に位置するローマの属州(下図)。



L418 猛獣の餌食

ローマ帝国では処刑の方法として罪人を猛獣と戦わせる刑が存在した。

-----ここから 130 ページ-----

L428 ざまあ見ろだ

偽予言者アレクサンドロスに対してのルーキアーノスの言葉。真実を語って自分の欺瞞を暴露したエピクロス派の者を排除できなかったことについて。

L428-429 「どうして～ならなかったのだろう」

「彼」はアレクサンドリアに向かった息子の話を持ち出して、偽予言者アレクサンドロスを批判したエピクロス派の者を指す。ルーキアーノスもエピクロスを支持していたので「彼」は仲間にあたる。ここでは偽予言者アレクサンドロスの言いなりになって「彼」に石を投げたパフラゴニア人たちの愚かさも非難している。

L435 『定論』

エピクロスの著作といわれる”*Principal Doctrines (Κύρια Δόξαι)*”のことを指すか？この『定論』は断片しか現存しない。

L440-443 「かの書物が～この呪われたる悪党は知らないのだ」

エピクロスの著作に対する賛辞とそれを焼いた偽予言者アレクサンドロスに対する批判。エピクロスは無神論的とも取れる立場から、死をすべての感覚の消滅だと考え、死の苦痛や死後の審判などを恐れる必要はなく「平静な心(ataraxia)」を持つべきだと説いた。また、精神的な幸福の追求を主張し、度を越した快楽・欲望は結果的に不快をもたらすとして批判した。

-----ここから 131 ページ-----

L445-446 ゲルマニアにおける戦

マルコマンニ戦争(162-180)のこと。162年以降、ドナウ川流域各地でゲルマン人の侵入が多発し、ローマ帝国軍は撃退に成功していた。しかし、169年頃にこれまでローマに協力的であったマルコマンニ族をはじめとする親ローマ的なゲルマン人諸部族が反ローマに転じたため、ローマ軍は劣勢に陥った。また、当時は疫病の蔓延により帝国全域で多数の死者が出るなどローマ帝国の国力が衰退したためローマ軍は苦戦し、ローマ軍が戦局を立て直しながらも戦争は長期化した。この戦争はマルクス・アウレリウス・アントニヌス帝が死去し、後を継いだコモドゥス帝が180年にマルコマンニ族らゲルマン人と講和を結んで終結した。この長い戦争でローマ・ゲルマン人はともに疲弊したため双方とも積極的攻勢にしばらく出ることができず、ドナウ川流域からのゲルマン人侵入は一時的に抑えられた。

L446 神去りましたマルクス帝

「マルクス帝」はマルクス・アウレリウス・アントニヌス帝を指す。「神去りました」はマルクス・アウレリウス・アントニヌス帝が死去したことを指す。彼が死去したのは180年であることから、ルーキアーノスがこの文章を書いたのはマルクス・アウレリウス・アントニヌス帝死後であったと思われる。(wikipediaなどでルーキアーノスの没年について「180年以後」となっているのはここから来ているか?)

L446-447 マルコマンニ族及びクワディ族

どちらも現在のオーストリア～チェコにかけて居住していたゲルマン人の一派。しばしばドナウ川を越えてローマ帝国領に侵入する一方、マルコマンニ族は一説によれば前1世紀に追放されたローマの将軍マルクス・ファビウス・ローマヌスがゲルマン人を糾合したことをルーツに持つといわれ、伝統的に親ローマ的であり、ローマ軍に騎兵を供給していた。

L448 イストロス河

ダニューブ川(ドナウ川)のこと。当時はダヌウィウス川といわれていた。初代皇帝アウグストゥスがライン川以西のゲルマニア経営を放棄して以来、ゲルマン人に対するローマ帝国の防衛線は、北海から黒海にかけてライン川ーリーメス・ゲルマニクス(ライン＝ドナウ川間に築かれた要塞線)ードナウ川のラインであった。このラインにはローマ軍の過半が駐屯していたとされ、常にゲルマン人の侵入に備えていたためライン川やドナウ川の駐屯軍はローマ軍最強の精鋭といわれ、内戦や皇帝の親征の際は真っ先に駆り出されて東方やブリタニアまで向かった。

L451 キュベレーの使

ライオンのこと。

L456-457 「そしてたちまち～蒙ったのだ」

170年頃、マルコマンニ族ら親ローマ的なゲルマン人が一斉蜂起してドナウ川を渡河してローマ軍本陣のカルヌントゥム(現在のオーストリア・チェコ国境付近)を襲撃し、不意を突かれたローマ軍は2万人以上を失って壊滅した。ここでの「たちまちにして」はL453-454の偽予言者アレクサンドロスの予言にある「たちまちにして勝利と大いなる栄光、望ましき平和とともにあらん」を踏まえた皮肉である。

L457 アクイレイアの事件

アクイレイア(右図 A)は、ローマ帝国の本国イタリアとノリリクム・ダルマツィア・パンノニア各属州の国境に位置する街でドナウ川方面への交通の要衝であり、ゲルマン人との戦争においては皇帝の本陣が置かれることが多かった。170 年、ローマ軍をカルヌントゥムに破ったゲルマン諸部族の軍はアクイレイアを包囲した。この危機は 171 年からのローマ軍決死の反攻によって回避されたが、アクイレイアはれっきとしたローマ本国であり、ローマ本国が危機にさらされたのは前 101 年のアルプスからのガリア人侵入以来であった(前 101 年当時はポー川以北アルプス山脈以南はガリア・キサルピナ属州であり本国ではなかった)。



-----ここから 132 ページ-----

L458-459 デルポイの弁解とクロイソスの神託の例

クロイソスは前 6 世紀のリュディア王国の王でペルシアと戦うべきか決めかねており、神託で名高いデルポイのアポローン神殿に神託を求めた。その結果は「もしペルシアと戦えば、非常に強大な帝国を滅ぼすだろう」というものであった。これをクロイソス王は自分がペルシアを滅ぼすことができると解釈し、スパルタやエジプトと同盟を組んでペルシアに侵攻したが失敗し、逆にペルシアのキュロス 2 世によってリュディアを攻め滅ぼされてしまった。これについて、デルポイ側は神託にあった「強大な帝国」とはペルシアではなくリュディアであり、解釈を誤ったクロイソス王に責任があるとした。これと同様、偽予言者アレクサンドロスも「勝利」を得るのがゲルマン人かローマか明示していないことを言い訳に予言の正当性を示そうとした(cf. 本文 L460-461 「神はなるほど勝利を予言されたが、ローマ人のかかの敵のかは明らかにされなかった」)

L465 「特に巻物が〜そうだった」

偽予言者アレクサンドロスの「神託」が真の神託などではなく、彼が密かにさまざまな技術を用いて巻物の封印を露見しないように破っていることを示唆している。

L469 一アッティカ・タラント

地中海世界での重量の単位 *talent* のこと。ギリシア・ローマでそれぞれ読みが相違がみられる。ギリシアでは「タラント」、ローマでは「タレント」といわれる。また貨幣の単位としてもつかわれ、ギリシアでは 6000 ドラクマ(銀 26kg)に相当す

る。ローマでは数千デナリウスに相当する。これは一般家庭の数年～数十年の年収に相当する。

L474 カリゲネイア

ギリシア文化圏の祝祭の一つ、テスモフォリア祭で祭られる女神の一人(西郷田美子「エレウシスの秘儀」(哲学会誌(27) 51-62, 2003 年, 学習院大学)より)。テスモフォリア祭自体が多分にエレウシスの秘儀のような秘密主義的要素を含んでいるため、文献は少なく詳しいことは不明。

-----ここから 133 ページ-----

L481 カリュプソー

ギリシア神話の海の女神、巨人アトラスの娘。

L482-483 「いったいどんな～睡をはかずにいられようか」

デモクリトスは L172 で偽予言者アレクサンドロスの欺瞞を看破しうる人物として挙げられている。ここではそうした人物のたとえであろう。「彼のもくろみ」とは当然、意味不明な予言により無知な大衆を惑わすことであろう。

-----ここから 134 ページ-----

L506-511 「ただ一つの～ばかりだった」

偽予言者アレクサンドロスの予言が欺瞞であることを示すために著者ルーキアーノス自身が「いつアレクサンドロスのいかさまが捕るだろうか(原文ママ)」という一つの神託伺いを出す際、まるで 8 つの神託を求めているかのような擬装をなすことで真に偽予言者アレクサンドロスが神託を得ているか試した。もし真に彼が神託を得ているのなら如何に擬装しようが一つの神託しか下りないからである。ここで 8 つの神託が下りたことから、偽予言者アレクサンドロスの神託はでたらめだとルーキアーノスは確信した。

-----ここから 135 ページ-----

L518 彼の市

「彼」＝偽予言者アレクサンドロスだと考えると、「彼の市」は彼の活動拠点であったアポーノテイコスか？後述するようにカッパドキアの総督に護衛兵を借りているところからもその可能性が高いか。

L519 カッパドキアの総督

この時のカッパドキアの総督はセヴェリアヌスではない。

L523-524 「私はそれに～片輪にしてやった」

著者ルーキアーノス自身が偽予言者アレクサンドロス(ルーキアーノスを敵とみなしていたにもかかわらずギリシアではよく知られた哲人の彼をむしろ表面的には歓迎した)の手に接吻するふりをしてその手に噛みついた。「片輪にしてやった」とあることからかなり強く噛みついたのだろう。

-----ここから 136 ページ-----

L529-530 「私の力で～私にするのか」

ルティリアヌスは執政官も務めたことのある属州総督であり、ローマの有力者であった。その義理の父親にあたる偽予言者アレクサンドロスを通じれば、ルティリアヌスに取り入ることができる、ということ。偽予言者アレクサンドロスは確かにルーキアーノスを敵視していたものの、その帝国内での知名度は意識していた(噛みつかれてもすぐに制裁を加えていない点から)。

L538 彼らはわれわれを海中に投ずるようアレクサンドロスに命ぜられていた

ルーキアーノスの知名度を考え、衆目の前で害を加えられないと考えた偽予言者アレクサンドロスはまず、自分に噛みついたルーキアーノスを寛大に許したふりをする一方、「底意のない鄭重な(本文 L568)」ふりをして仇敵ルーキアーノスを海上で暗殺しようとした。

-----ここから 137 ページ-----

L546 エウパトール王

黒海北岸地方のギリシア植民市連合に起源をもち、前1世紀ごろにローマの属国となったボスポラス王国(右図の濃赤～薄赤の部分)の国王、ティベリウス・ユリウス・エウパトール(?～174)のこと。



L552 ヘーラクレイアの哲人ティーモクラテス

ルーキアーノスと同時代のストア派哲学者。

L556-557 「このような～やめにした」

偽予言者アレクサンドロスに同乗しているビテュニア・ポントス総督アヴィートゥスのこと。当時の属州総督は属州内でかなりの権限を認められており、属州内での徴税・財政運営および属州内の司法権を司っていた。つまり、ルーキアーノスが偽予言者アレクサンドロスを起訴した場合、彼の活動地域であるパフラゴニア地方を管轄すべきビテュニアやポントスの総督が裁判を行う権利を持つこととなる。

L563-564 「脚が腰の～死に方をした」

偽予言者アレクサンドロスは 70 歳前後で壊疽によって死去したといわれている。
170 年頃のできごとであったとされている。

参考文献

- ルーキアーノス著、高津春繁訳「遊女の対話 他三篇」(岩波書店, 1961 年)
ルキアノス著、内田次信・戸高和弘・渡辺浩司訳「ルキアノス全集 4 偽預言者アレクサンドロス」(京都大学出版会, 2013 年)
西郷田美子「エレウシスの秘儀」(哲学会誌(27) 51-62, 2003 年, 学習院大学)
荒井献「トマスによる福音書」(講談社学術文庫, 1995 年)
荒井献・大貫隆・小林稔・筒井賢治「ナグ・ハマディ文書<1>～<4>」(岩波書店, 1997 年)
筒井賢治「グノーシスー古代キリスト教の<異端思想>」(講談社選書メチエ, 2004 年)
大貫隆「グノーシスの神話」(講談社学術文庫, 2014 年)
上智大学中世思想研究所編・小高毅監修「中世思想原典集成 Iー初期ギリシア教父ー」(平凡社, 1995 年)
J.N.D.ケリー著・津田謙治訳「初期キリスト教教理史(下) ニカイア以後と東方世界」(一麦出版社, 2010 年)
他